

かけがわ学力向上ものがたり
—我が校のものがたり 実践編—

平成29年2月
掛川市教育委員会

「子どもたちの未来のために」

「わたしもそうやって考えてたんだけど途中で変わったの。前に出て説明していい?」「先生!ちょっと難しかったけど、やり方がわかったらできるようになった!」

教室では、子どもたちが様々な問題に対して友達と関わりながら解決しようとして取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があり、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」があります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭・地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・協働的に学習に取り組む子どもたちを育ててまいりました。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもたちの学力向上の実現に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

平成29年2月
掛川市教育委員会

目 次

| | |
|--|----|
| 日坂小学校 匂坂 匡伸 ----- | 3 |
| 「じっくり考え、表現できる子」の育成 ～目指す子どもの姿に迫る算数科の授業づくりのために～ | |
| 東山口小学校 袴田 由子 ----- | 5 |
| 学びの根を確かめ、授業改善の推進のために | |
| 西山口小学校 高村 知史 ----- | 7 |
| 「思いを受け止め 伝えられる子」の育成を目指して | |
| 上内田小学校 村田 智 ----- | 9 |
| 「やってみたい!」「なぜ?」があふれる授業づくり | |
| 城北小学校 大庭 章弘 ----- | 11 |
| 「確かな学力の育成」を目指して | |
| 第一小学校 青島 智 ----- | 13 |
| 子どもたちの「考えたい!」をもっと!! | |
| 第二小学校 奥川 真智子 ----- | 15 |
| 友達から学ぶ楽しさを～みんなで考える授業を目指して～ | |
| 中央小学校 松浦 容子 ----- | 17 |
| 「伝え合う子」の実現を目指して | |
| 曾我小学校 神谷耕平 ----- | 19 |
| 「自分の思いや考えをより良く表現できる子」の育成を目指して | |
| 桜木小学校 大瀧 和美 ----- | 21 |
| 「学んでいく子」を育成する授業 ～桜木型アクティブラーニングの実践を通して～ | |
| 和田岡小学校 安間 和美 ----- | 23 |
| 「地域の太陽」をめざして | |
| 原谷小学校 中村 美由紀 ----- | 25 |
| 主体的に学ぶ子どもの育成 | |
| 原田小学校 花嶋 留美子 ----- | 27 |
| 国語科における指導の積み上げの大切さ | |
| 西郷小学校 鳥山 ルミ ----- | 29 |
| 自己肯定感を高め、個を強くする～低学年の指導を通して～ | |
| 倉真小学校 法月 淳 ----- | 31 |
| 「説明する力」を高めるICT機器活用 | |

| | | | |
|--------|------------------------------------|-------|--------|
| 土方小学校 | 岩倉 智子 | ----- | 3 3 |
| | 「学習を楽しみ、学力を付ける子」の花を咲かせよう | | |
| 佐東小学校 | 永田 和輝 | ----- | 3 5 |
| | 主体的に学び、「できた」「わかった」を実感できる授業づくりを目指して | | |
| 中小学校 | 増田七奈子 | ----- | 3 7 |
| | チーム中小「できた」「わかった」がいっぱいの授業を目指して | | |
| 大坂小学校 | 平野 裕亮 | ----- | 3 9 |
| | 自治的な能力を育む特別活動 | | |
| 千浜小学校 | 渡辺 智美 | ----- | 4 1 |
| | 主体的な学びを目指して | | |
| 横須賀小学校 | 湯川 雅世 | ----- | -- 4 3 |
| | 一人ひとりが輝き、意欲的に取り組める子の育成を目指して | | |
| 大淵小学校 | 伊藤 愛 | ----- | 4 5 |
| | いきいきわくわく楽しく学ぶ子ども | | |
| 栄川中学校 | 細井 道浩 | ----- | 4 7 |
| | 「学び合い やり抜く 栄中生」の実現へ | | |
| 東中学校 | 石野 裕子 | ----- | 4 9 |
| | 物語を再発見 | | |
| 西中学校 | 西郷 昌弘 | ----- | 5 1 |
| | 1P神話へのチャレンジ | | |
| 桜が丘中学校 | 佐藤 徹弥 | ----- | 5 3 |
| | 2年目教員 1年生の担任として | | |
| 原野谷中学校 | 池谷 恵 | ----- | 5 5 |
| | 出現！謎の「ペニヤ人」 | | |
| 北中学校 | 宮崎 直哉 | ----- | 5 7 |
| | 知的な英語授業を目指して | | |
| 城東中学校 | 小杉 栄乃 | ----- | 5 9 |
| | 「生徒が主体的に追究・表現する」授業をめざして | | |
| 大浜中学校 | 大杉 鏡康 | ----- | 6 1 |
| | Road To Learning ～ICTを効果的に用いて～ | | |
| 大須賀中学校 | 横山 信吾 | ----- | 6 3 |
| | これからの社会に求められる資質・能力の育成を目指して | | |

「じっくり考え、表現できる子」の育成

～目指す子どもの姿に迫る算数科の授業づくりのために～

日坂小学校 匂坂 匡伸

本校の研修と児童の実態、自身の反省

本校の研修テーマは、「じっくり考え、表現できる子～進んでかかわり、自分を深める～」であり、目指す子どもの姿は、「自分の思いや考えをわかりやすく表現する姿」「考えを比べながら聴き、深め合う姿」です。栄川中学校区一貫教育研修での共通テーマとして取り組んでいます。特に、目的を持った交流方法によって子どもたちの考えがどのように変容したのか、どのような効果を生んだのかというところを重点的に研修しています。

私が担任をしている5年生の児童は、個人学びの際に、自分の考えをつくることが苦手な子が多くいます。また、自分の考え以外の方法（別解）をつくることができない子も多いです。さらに、学習したことが定着せず、既習事項を生かした考えづくりができない子が見られます。

そこで、以下のような手立てを打つことで、課題を解決できると考え、私の研修教科である算数科で実践してきました。

仮説

- (1) 実物（具体物）を使って自分の考えをつくる時間の確保
- (2) 考えを比べながら聴き、深め合うための交流の工夫
- (3) 重要な算数用語や既習事項を掲示し、学習の材とする。

検証

実践1 実物（具体物）を使って自分の考えをつくる時間の確保

「図形の角」の単元では、四角形や五角形のワークシートを配布し、自由に切って角を合わせたり、補助線を書き込んだりする作業を行いました。ワークシートを使って作業を行うことにより、学級全員が自分の考えを進んでつくることができました。その後の交流では、自分の考えと友達のことを比較しながら伝え合う姿が見られました。



また、「体積」の単元では、 1 cm^3 のブロックを体積を求めたい直方体に積み上げる作業を行うことで、一人一人が考えを持ちました。最初は立体の体積のイメージが持てなかった子も、実物による確かめ活動を行うことで、直方体の体積の求め方は、1段目の体積×高さになり、縦×横×高さで求められることが実感として理

解することができました。

実践2 考えを比べながら聴き、深め合うための交流の工夫

「小数のわり算」の単元では、2種類のヒントカードを用意し、同じヒントカードを使う子同士で協力して解法を話し合いました。ヒントカードを用いたグループ分けを行ったことで、同じ考えのグループ内交流では「自分の思いや考えをわかりやすく表現したい。」全体交流の場では、「考えを比べてみよう。」と意欲的に活動する姿が見られるようになってきました。

また、グループ交流に入る前には、ネームプレートを使用し、誰がどんな考えを持っているのかがわかるようにしました。このことによって、交流の際には、「～さんと違って～です。」「～と似ていて～と思います。」と、考えを深め合う姿が増えてきました。

実践3 重要な算数用語や既習事項を掲示し、学習の材とする

「分数のたし算とひき算」の単元では、確実に身につけたいことを、穴埋め式にして授業のまとめをしました。授業後は算数コーナーに掲示とし、常に既習事項が見える状態にしました。これにより、前時のまとめから、本時のヒントとして考えたり、交流の際に「これって前回のあれじゃない？」と掲示を生かしたりする姿が見られました。5年生で学習する、子ども達にとって難しい算数用語も、掲示を見て区別が付くようになりました。



成果

- (1) 具体物を使って考えることは、個人学びの段階で自分の考えを作ることが苦手な子にとって、有効であると感じている。今後も子どもたちの実態に合った具体物を使って考える時間を確保していきたい。
- (2) 子どもたちは、交流を通して自分の考え以外の方法（別解）を知ることにより、より良い考えを持つことができた。また、子ども同士で交流して解決するので、教師の説明が少なくなった。
- (3) 前時までの学習が本時に連続的につながり、学力の定着が見られた。

課題

- (1) 子どもに疑問や必要感を持たせ、解決したいという思いを共有した課題設定を心掛けたい。
- (2) 学習問題がつくられるまでに時間がかかっている。これにかかる時間をより短縮し、追究する時間を増やせるよう、心掛けたい。

学びの根を確かめ、授業改善の推進のために

東山口小学校 袴田 由子

1 こんな子どもたちの姿を願って

東山口小学校の子どもたちは、真面目に一生懸命に学ぼうとする子が多く、与えられた課題に対して前向きに取り組むことができます。しかし、小規模校ということもあり、自分の考えに自信をもてなかったり、自ら学ぼうとする意識が低かったりします。そこで、今年の東山口小学校研修テーマである「進んで表現し、深め合う授業」を通して、子どもたちが自ら学び合う姿を目指しました。

4年生の子どもたちは、自分の意見をしっかりともてていますが、進んで言える子が少なく、発表した子の意見に流されてしまう傾向がありました。まずは、自分の考えをもつ時間を十分に確保してから授業を進めることにしました。

2 安心して学び合える学級づくり

安心して自分の意見が言える、学び合える、支持的風土の醸成を目指して、【「発表名人表」の取組】、【読書指導】、【言葉の指導】、【寺子屋（放課後学習支援教室）】を行ってきました。

発表名人表の取組による、聴き方・話し方のレベルアップを目指しました。今までは、自分の意見を言って終わりになっていた子も、相手に問いかけるような話し方を意識し、聴

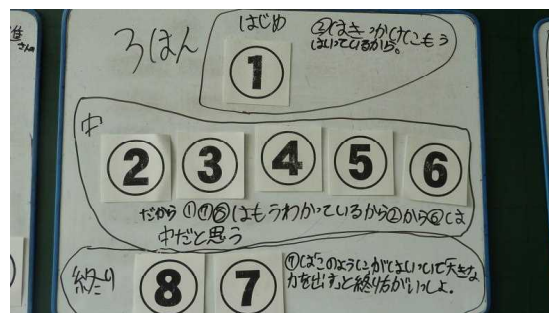
| 各人 | 1級 | 2級 | 3級 | 4級 | 5級 | 6級 | 7級 | 8級 | 9級 | 3,4年 |
|-----------------|----------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|-----------|---------------------------|----------------|-----------------------|--------------|-------------------|------|
| 他の人の意見を、聞くわがややく | 聴き方、手紙を入れた時、その姿、しめしめが、わかりやすく伝える。 | みんなに話かけながら、わかりやすく伝える。「1です」 | 理由をつけて、しっかりと意見が言える。「みんなと違って」「みんなと違って」 | 反対意見が言える。 | 自分の意見を、はっきりと伝える。「みんなと違って」 | 話せる。「1です」「2です」 | みんなに聞きながら、話せる。「わがややく」 | 「はい」の返事ができる。 | 相手の話を聞いて、話し掛けてみる。 | |
| | | | | | | | | | | 1 |
| | | | | | | | | | | 2 |
| | | | | | | | | | | 3 |
| | | | | | | | | | | 4 |
| | | | | | | | | | | 5 |

き手にも分かりやすい発表の仕方を身に付けていきました。また、寺子屋（放課後学習支援教室）では、昨年まで、作文指導に力を入れてきました。全国学力・学習状況調査でもこれまでの成果が表れつつあることが分かり、今年からは作文指導の他、四則計算も取り入れることにしました。4年生では、かけ算の筆算や引き算の繰り下がりに苦手意識を持っている子が多くいました。そこで、計算問題を繰り返し行い、四則計算の確実な定着を目指し、子どもたちの自信につなげることができました。

3 課題設定の大切さ

子どもたちが、自ら学びたい、もっと知りたいと思えるためには、課題設定の工夫が大切だと感じました。東山口小では、これまで交流に力を入れてきました。し

かし、ペアやグループ、全体と交流の持ち方を具体的に示してきたが、交流することが先走り、ただ交流することのみで終わってしまっていたことが多かったです。研修を通して、子どもたちが交流の必要性を感じさせるような課題設定の工夫が大切だと感じました。そして、課題設定を工夫することで子どもたちは、何も指示されなくても、自然と子ども同士との交流を始めることができました。自分で調べてみたり、分からないことは、友達に聞いてみたりしながら考えを深めていきました。また、自分が解決できたことを友達に教えている姿も見られました。ただ、教えるだけではなく、相手が納得するまで根気強く教えている姿が印象的でした。



さらに、グループで交流するときには、ホワイトボードや画用紙を用意するなど、グループで話し合ったことを視覚的に表すことが有効であると感じました。このときに、交流の視点を明確にすることで子どもたちは、課題に沿った交流ができることが分かりました。

4 これからも学び合いを続けていく子どもたちに

東山口小は、栄川学園の一貫研で1園3校が共通して研修に取り組んでいます。小学校で学んだことを、次の中学校へつなげていけるよう学び合いの基礎基本を小学校で身に付ける必要があると感じました。今年度の研修を通して、子どもたちは自分の思いや考えを友達に伝えることの楽しさを少しずつ実感しているように感じました。課題ができたときには、グループのみんなで喜び合っている姿や自分の課題が終わった後も、「誰かに教えてきてもいいですか」と自ら進んで学び合う姿を見ることができました。今まで、発表することに苦手意識を持っていた子たちも、自信をもって発表する姿が見られるようになりました。これからも、子どもたちが学び合える環境を提供し、楽しんで学び合いを続けていく子どもたちを育てていきたいです。



「思いを受けとめ 伝えられる子」の育成を目指して

西山口小学校 高村 知史

授業づくり(研修の方向性)のものがたり

【平成27年度 学校評価結果】

| 児 童 | | 保 護 者 | |
|---------------------------|-----|---------------------------------|-----|
| 授業の内容が分かる。 | 91% | お子さんは授業の内容を理解している。 | 91% |
| 人の話を目と心に向けて聞いている。 | 94% | お子さんは視線を合わせて話をしたり聞いたりしている。 | 92% |
| 進んで自分の考えを発表したり話し合ったりしている。 | 82% | お子さんは進んで自分の考えを発表したり、話し合ったりしている。 | 83% |

平成27年度の学校評価結果です。平成28年度西山口小学校では、この学校評価から見た継続すべき成果、改革すべき課題を明確にして取り組むことにしました。

継続すべき成果としては、「授業の内容が分かる」項目。改革すべき項目は、「自分の考えを伝える」です。子どもたちが、授業の内容が分かり、自分の考えを伝えることができるよう、授業者は「身に付けさせたい力」を明確にもって授業に臨みたいと考え、今年度の研修テーマを、以下のように設定しました。

思いを受けとめ 伝えられる子の育成

～付けたい力を明確にした言語活動と学習問題の設定を通じて～

また、授業を展開していく中で、以下の2点に焦点を当てて授業研究を推進していきます。

○付けたい力を明確にして、単元は構成されているか。

○付けたい力を明確にして、1時間の授業を構成しているか。

○各教科においては、言語活動を意識して取り組みます。

| | |
|-----|---|
| 国語科 | 単元を貫く言語活動と付けたい力を明確にした課題を設定し、学力を伸ばします。 |
| 算数科 | 「何を」「何のために」「どのように」学ぶのかを明確にして授業を構想し、言語活動によって、付けたい力と共に思考力・判断力・表現力を高めます。 |
| 他教科 | 目標達成に有効な言語活動と、付けたい力を明確にした課題設定を工夫して授業を構想します。 |

○学びのUD(ユニバーサルデザイン)の視点を、授業の中の手立てとして取り入れます。

| | |
|-----|--|
| 焦点化 | 「押さえた」付けたい力に対して、学習問題や活動を焦点化した授業を展開します。 |
| 視覚化 | 文字や音声言語に加え視覚的な情報を効果的に活用します。 |
| 共有化 | 一人一人の学びを伝え合い、全員で理解を深めます。 |

○校内研修の方法を工夫し、全職員で学び合います。

| | |
|------|--|
| 中心授業 | 全職員で参観し、「成果」「課題」を出し合い、「なぜそのような成果や課題が生まれたのか?」「その課題を解決する代案は何か?」を検討し、学び合います。 |
| 校内研修 | 全員が参観した中心授業の後、今の研修の進捗状況をKPT法で検討します。K(keep)・P(problem)・T(try)に合わせて出し合い、次回の研修につなげます。 |
| 振り返り | 授業を参観した後、明日から生かしたい学んだことを振り返りとして書きます。 |

授業づくり(実践例)のものがたり

生活科(2年) えがおのひみつたんけんたい～たんけん はっけん ほっとけん～

2年生では、自分たちが興味をもった地域の場所にて探検に出かけました。自分たちでお願いの手紙を出したり、2回の探検で「見たい」「聞きたい」「やってみたい」ことを出し合ったりした上で、グループごと探検に臨みました。本時は、探検して学んだことの中で、何を伝えるかを個人の情報からグループの情報に絞ることをねらった1時間です。

【ポイント】 全員が自分の考えをもつ！

まず、自分の考えをもつこと。そして、考えを伝える(出す)こと。

友だちに伝えたいことベスト3は何だろう。



インタビューをしたり、体験活動を通して集めたりした情報カードから、最も伝えたいことを**3点選び付箋に記入**させました。**短い言葉で要領よく書くように指示**を出したところ、ほとんどの子が5、6分で書き終えることができました。

自分のベスト3をもとに、グループのほっとけんベスト3を考えよう。

【グループ学習の形態】

子どもたちは、

- ① 他のグループが知らないようなこと
- ② 笑顔のひみつにつながるようなことをキーワードに絞り込みを行いました。

【ポイント】 付箋の活用

付箋をもとに話し合いを行うことで、付箋を操作しながら話し合いが出来ます。考えていることが見えます。

→ **全員が話し合いに参加しやすい場となる。**

成果

〇3つに絞り込ませることで相互交渉能力や合意形成能力を育てる機会をつくることができました。

全員が参加をしたことにより、本校が向かっている研修テーマに沿って付けたい力をつけた結果が出ています。



授業づくり(今年度の結果)のものがたり

実践を積み重ねた結果、平成28年度の学校評価は以下のようになりました。

【平成28年度 学校評価結果】

| 児童 | | 保護者 | |
|---------------------------|-----|---------------------------------|-----|
| 授業の内容が分かる。 | 92% | お子さんは授業の内容を理解している。 | 98% |
| 人の話を目と心に向けて聞いている。 | 94% | お子さんは視線を合わせて話をしたり聞いたりしている。 | 95% |
| 進んで自分の考えを発表したり話し合ったりしている。 | 80% | お子さんは進んで自分の考えを発表したり、話し合ったりしている。 | 80% |

平成27年度学校評価と比較すると、「授業の内容が分かる」項目で、児童が1%、保護者が7%上昇しました。また、「お子さんは視線を合わせて、話をしたり聞いたりしている」項目で、3%上昇しました。これは、子どもたちと職員が同じ「身に付けたい力」に向かって授業をつくりあげている大きな成果であると考えられます。

今後も成果として得た点は継続しながら、「進んで話げできた」と自信をもって言える児童が増えるように西山口小のものがたりを進めていきたいと考えています。



「やってみたい!」「なぜ?」があふれでる授業づくり

上内田小学校 村田 智

1・2・3の学校

「上内田小ってどんな学校?」と聞かれたら、子どもたちは、「1・2・3の学校」と答えます。本校は、全校児童123人の学校です。それだけでなく、本校の自慢である一輪車の1、二宮金次郎をモデルに子どもたちの自尊感情を高めるにこじろう運動の2、授業の中で特に力を入れている算数の3が本校の合言葉です。教師も、算数に重点を置き、研修を行ってきました。また、研修テーマを、『「やってみたい!」「なぜ?」があふれでる授業づくり～学習問題から、まとめ・確かめる活動へ～』とし、授業に取り組みました。

「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」の視点から

(1) 押さえる

2つのことを押さえた上で、単元の学習に入りました。1つ目は、子どもの実態を押さえることです。単元の学習に関連する既習事項が盛り込まれた「じゅんぴテスト」を活用しました。定着が不十分な部分については全体で復習したり、個別に指導したりして、子どもたちが同じ土台のもと単元をスタートできるようにしました。2つ目は、付けたい力を押さえることです。学習指導要領や単元テスト、領域別系統表を確認することで、本時や単元のゴールを明確にして授業に臨むことができました。

(2) 仕掛ける

研修テーマにある「やってみたい!」「なぜ?」を引き出すために仕掛ける手立てを検討してきました。「曲線のある形の面積」の単元では、葉っぱ型の面積を求める学習を行いました。「この図形に隠れている面積が求められそうな形は?」という問いで、解決への見通しをもたすことができ、「やってみたい!」という思いを引き出すことができました。他にも、視覚的なこと、具体物、言葉がけ、形態などを仕掛けるポイントとして意識しました。

また、複数の教科書を参考資料として用いました。児童の実態と照らし合わせて考えると、普段使用している教科書よりも、より興味・関心を導く学習課題となりそうなものがあり、仕掛けるポイントを考える有効な手がかりとなりました。



(3) 確かめる

研究授業では、授業者以外の教師が児童の反応や取り組む様子を分担して撮影したり、チェックしたりして、クラス全員分の学びの姿を記録しました。そして、子どもの学びの姿から授業を見直すことに取り組みました。事後研修では、映像も使ったりフレクシオンをすることで、授業者だけでは見取ることができなかった子どものよい表れや課題を把握することができ、指導の改善に役立てることができました。

ウサギ・カメ・ウサギ・カメの授業展開

ウサギ・カメと聞くと、足の速いウサギと足の遅いカメが競走をし、最終的にはカメが勝利する話を思い浮かべるのではないのでしょうか。ウサギにはパッと素早く、カメにはじっくりという意味が込められています。学習課題から学習問題はウサギ、追究の場面はカメ、まとめはウサギ、確かめる活動はカメ。これが、ウサギ・カメ・ウサギ・カメの授業展開です。これまでは、学習課題を提示し、考えていく中でモヤモヤしたものを学習問題とすることを大切にしてきました。しかし、これでは学習問題を提示するまでに時間がかかってしまいます。学習問題を提示するまでの時間を短くするために、前時との違いを考えさせたり、既習事項と比較させたりするなどして短時間で見通しをもたせることを心がけました。時には、教師が第2の課題として与えるように引っ張っていくこともありました。まとめの部分では、右の4つの方法を使い分けながら、教師が簡潔に押さえ、時間短縮をめざしました。

- ①一緒に書く。
- ②押さえない言葉を空欄にして書かせる。
- ③書き出しを提示して、その後の文を書かせる。
- ④重要な言葉を提示して、文を書かせる。

確かめる活動の充実が、次の「やってみたい!」「なぜ?」へ

まとめを書き終わると、子どもたちは今日の確かめ問題は何かなと考え始めます。中には、教科書を開いて、この問題かなと予想をしている子もいます。毎時間確かめる活動を位置づけることで、こういった姿が見られるようになってきました。

また、確かめる活動での「できた!」「わかった!」は、子どもたちの達成感や大きな自信となりました。そのことが、次の時間の内容も「やってみたい!」という思いになったり、〇〇の場合ではどうなるのだろうといった、新しい「なぜ?」につながったりしました。確かめる活動の充実が、次の「やってみたい!」「なぜ?」につながっていくことを実感しました。こういったよいサイクルを創り出し、子どもたちの学力がさらに向上するよう今後も取り組んでいきます。



「確かな学力の育成」を目指して

城北小学校 大庭 章弘

目指す子ども像を語り合おう

～じょうほく型「新たな学びのプロセス」の継続～

誰にでもやさしい学校、誰もがわかる授業を目指した3年以上前からの取り組みと、昨年度からの市指定研究「確かな学力の育成」を目指した取り組みにより、以下のような子どもの姿が増えました。

- 課題に前向きに取り組み、自分なりの考えや思いをもつ。
- 友達の意見を聞いて、自分の考えを深める。 ○学びに浸る。

今年度を迎えるにあたり「確かな学力」を身に付けた子ども像を

- ・既習事項や体験等を用いて挑戦する子
- ・根拠を明らかにして自分の考えを表現できる子
- ・友達の考えを受け止めてさらに考えを深め、表現できる子
- ・理解したことや新たな疑問、次時への意欲を表現できる子



としました。点数至上主義に陥らないよう「子どものためになる、子どもの力が育つ研究にしよう。」と全職員で誓い合いました。

目指す子ども像の具現に向けて学校・家庭・地域が連携するじょうほく型「新たな学びのプロセス」を継続することにより、未来を創り出す子どもに必要な「かけがわ型スキル」を育みたいと考えたのです。

じょうほく型新たな学びのプロセスを構築しよう

具体的には9項目に力を入れました。

- ① 授業過程の再構築：「学び合い高め合う授業づくり」に取り組む。
- ② 言語活動の充実：自分の考えや思いを文章やスピーチで表現する。
- ③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得：各学年の学習内容の定着と、学習ルールの習慣化を図る。
- ④ 読書活動の充実と学校図書館を活用した授業：読書の幅を広げ、意欲を高める。
- ⑤ 心の教育の充実：自尊感情を醸成し、人間関係を高める。
- ⑥ 道徳教育の充実：「かけがわ道徳」をはじめ、学んだ内容を生活に生かす。
- ⑦ 健康教育・体づくり活動の充実：基本的な生活習慣への意識を高めたり、元気に活動、生活するための体力を養ったりする。
- ⑧ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学校づくり：誰もが安心できる学校づくりに取り組む。
- ⑨ 家庭・地域への発信と連携：家庭学習の習慣づくりや冀北学園地域コーディネーターと連携した学習支援を行う。

学校生活の充実ぶりと子どもの成長ぶりを確かめよう

- ① 画像や具体物を用いることで子どもの興味や関心が高まりました。また、話し合う内容や相手を明確にすることは、友達の考えに耳を傾けてじっくり考える子どもの姿につながりました。さらに、まとめの時間を位置付けることで、学習した内容をみんなで確認したり、自分の言葉で表現したりする習慣が定着しました。
- ② スピーチの内容を「おすすめの本」や「気になるニュース」など各学年の実態に合わせて、相手に伝わる声の大きさや「始め」「中」「終わり」に気を配る子どもの姿が増えました。また、自分の考えや思いを文章にできると気持ちよいというような感想も聞かれました。
- ③ 年3回のチャレンジテストは漢字や計算をはじめとする学習内容の定着につながりました。また、学習用具やノートの書き方等のルールを全校でそろえることで、落ち着いて学習する環境が整っています。
- ④ 国語の教科書「この本読もう」を軸に課題図書を選定したり、図書ボランティアと連携（読み聞かせ、学校図書館の整備等）したりすることは、貸し出し冊数の増加やベストブックの変化に表れました。
- ⑤ 子どものよさや頑張りを教職員が認め、校長先生から「かがやき賞」が授与されることは、子どもの自己肯定感の高まりにつながりました。
- ⑥ 「なるほどなっとく金じろうさん」を用いたり、地域人材と連携したりすることで、学んだ内容がより身近になり、生活の中にも生きるようになりました。
- ⑦ 食事、運動、睡眠など、生活習慣を大切にすることが体力や学力の向上につながるという意識が高まりました。
- ⑧ じょうほく型スタンダードの定着により、生活や授業のしやすい環境がさらに整い、学校への安心感が高まりました。
- ⑨ 家庭学習の仕方や学習内容を学校と家庭とで共有できたので、自主学習の質が向上しました。また、地域の方々に野菜の世話やミシンでの縫い物等をご支援いただいたことで学習がより充実しました。

さらなる「確かな学力の育成」を目指そう

児童へのアンケートの結果（H28.7）、95.6%の子どもが授業がよくわかると回答しました。よくわかるという自信は全国学力学習状況調査の結果にも反映されています。また、授業の終わりには「じゃあ、〇〇したらどうなるのかな。」や「次は△△してみたい。」といった新たな疑問や次時への意欲がしばしば生まれています。じょうほく型「新たな学びのプロセス」の継続により、「かけがわ型スキル」は確実に育まれていると言えます。

ただし、「確かな学力」を身に付けた子ども像の具現は充分とは言えません。「学びの環境改善のための提言」をもとに、今後も授業改善の強力な推進に努めます。

子どもたちの「考えたい！」をもっと！！

第一小学校 青島 智

はじめに

私は、今年度小学校2年生の担任をしています。本校の児童、私の学級の児童の実態としては、課題が出されると、それに向かって一生懸命に取り組むがんばり屋さんが多いです。その反面、課題がないと自分で考えて動くことができず、自ら意欲をもって取り組む姿としては、十分とはいえないのが現状です。

以上のような実態をふまえて、今年度は特に、『学ぼうとする意欲』を高めるために日々の実践に取り組みました。本校が今まで実践してきたユニバーサルデザインの視点に立った授業改善や、自分らしさを発揮しやすい少人数でのグループ学習を取り入れるなどの学習形態の工夫が有効な手立てとなると考え、実践を行いました。

焦点化・視覚化・個への対応の手立てを打つ

(1)「長さ(1)」の実践(主に焦点化についての実践)

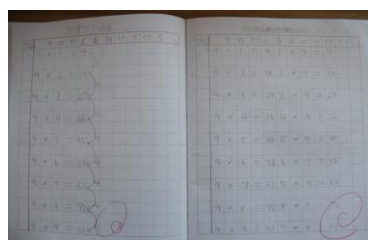
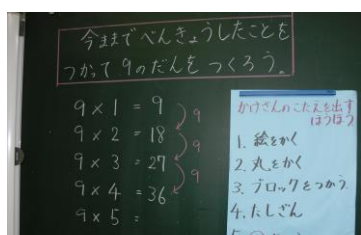
算数の長さを比べる学習では、子どもたちの思考を同じ土俵に乗せることを意識して実践しました。

導入で15cmと23cmなどの同じ単位同士の長さ比べを行い、既習をもとに、『同じ単位同士なら比較できる！』ことを印象付け、学習を進めていきました。その後、単位が違う6cmと58mmは、どちらが長いのか投げかけると、「わからない」「単位が違うからどうしたらいいのかな？」という、子どもたちの声から学習問題ができ、今日学習することが共通のものとなりました。課題が焦点化され、明確になったことにより、どの児童もノートに考えを書き、自ら解決しようとする意欲が見られました。

(2)「かけ算(2)9の段の構成」の実践(主に個への対応についての実践)

算数のかけ算の学習では、今まで学習したかけ算の答えの求め方を使って、新しい段のかけ算を構成することを行いました。学級の中には、課題に対して見通しをもって考えることに苦手意識を抱えている児童も多いため、全員が自分の力で9の段の構成ができるようにと、見通しをもつための2つの手立てを打ちました。1つ目は、今まで学習したかけ算の答えの出し方がわかる掲示を作ったこと。2つ目は、すぐに九九を構成させるのではなく、 9×1 から 9×4 まで答えの求め方を一度全体で確認をしたことです。2つの手立てを打ったことで、どの児童もどのように九九の構成をすればよいか見通しをもつことができました。児童の一人は、掲示を見ながら、「じゃあブロックで考えてみる！」と言い、操作しながら9の段の構成を行うなど、意欲的に学習に取り組む姿が見られました。また、苦手意識を感じている児童だけでなく、そ

他の児童もその掲示を頼りに、今までの学習を思い出していました。苦手意識を抱えている児童のために手立てを打つことは、その児童はもちろん、その他の児童にも助けとなり、前向きに学習するために有効だということを改めて感じました。



友達と関わり合いながら学習するグループ学習

かけ算の 12×3 の答えの求め方を考える学習では、授業の中でグループ学習を取り入れ、児童が関わり合う場面を設定しました。

図を描く方法で求めるグループ、たし算を使って求めるグループなど、それぞれの方法ごとにグループに分かれ、ホワイトボード

に自分たちの考えを書いていきました。普段の全体学習では、自分の意見を伝えるのに抵抗がある児童も

「ちょっと待って、こうじゃないの？」と、友達に尋ね、尋ねられた児童も身振り手振りを使って説明をするなど、友達と関わり合いながら学習する姿が見られ



友達と関わり合って学習することで、わからないことをすぐに尋ね、安心して学習でき、その安心感が前向きに学習する態度につながりました。また、尋ねられた児童も自分のもっている知識を伝えることで思考が深まり、より自分の力を確かなものにすることができました。

最後に

学びのユニバーサルデザインの視点に立った授業改善を行うことや、グループ学習を授業の中に位置付けることは、前向きに学習に臨む子が増えるために有効な手立てであることを感じました。

しかし、実践を重ねる中で、子どもたちの学ぶ意欲は、まだまだ高めることができる可能性を感じました。日々の教材研究をしっかりと行うことで、「考えたい!」「なんだろう?」と考えたくなるような授業づくりをしていきたいです。そして、自分の意思や疑問、何でも言い合える子を目指して、ペア・グループ学習など学習形態の工夫を今後も取り入れ、児童の学ぶ意欲をさらに高め、最終的に主体的・探求的な学びができる児童を育てていきたいです。

友達から学ぶ楽しさを ～みんなで考える授業を目指して～

第二小学校 奥川 真智子

一人一人の意見を大切に

4月、授業を行う中で感じたこと。それは、友達から学ぼうとする気持ちが弱いということ。発表をする時には、友達ではなく教師を見て、発表の後は、みんなが声を揃えて「いいです。」の反応。なるほど！そう考えるか！と一人一人がきらりと光る意見を持っているのに、その意見を大切に聞くことができていない状態に、もったいないと強く思いました。友達から学ぶ楽しさを感じて欲しいと考え、友達と関わり合いながらみんなで考え解決する授業、一人一人が主役になれる授業を作ろうと取り組みました。

友達と関わろう～意見を聞き合おう～

(1) 聞いて、反応しよう

自信を持って意見を伝えるには、良い聞き手が必要である。そのために『反応あいうえお』を作成し、自然な反応ができるように取り組んだ。授業中、「今の反応、素敵だね。」と良かった反応を取り上げ、全体に広げていった。また、1時間の中で反応ができたか確かめ、全員できたら金、20人以上で銀のシールを貼っていく「目指せ！聞き方名人」を行った。反応するために意識して聞く子が増え、金を取る日が続いた。すると子どもから「どの時間でもやろうよ。」と自分たちでレベルを上げ挑戦する姿も見られた。

イベントや日々の授業の取り組みで、子どもたちから自然といろいろな反応が出てくるようになった。「ああ。だから～なんだね。」「すごい、気付かなかったよ。」「それって、～ってことだよ。」と友達の意見を聞いているからこそ出る反応が増えた。

(2) ペアで交流ふわふわ作戦

いろいろな授業の中でペア交流を多く取り入れました。自分の意見と比べながら交流することで、友達の良さを発見でき、楽しさを感じられます。交流時には赤青鉛筆を持ち、友達の意見を読んで良かった箇所に花丸を書き、一言メッセージを言うようにしました。そうすることで、友達に認められた嬉しさを感じることができます。今からペアで交流するよと伝えると、嬉しそうに赤青鉛筆



を用意し、交流を始める子どもたち。男女関係なく交流を行い、「〇さんと同じだったよ。」「〇さんの意見がとていいよ。」「見て！こんなに花丸もらった。」と教師に伝えてくる笑顔から、友達と関わる楽しさを感じていることが伝わってきました。

(3)「分からない。」を大切に

友達の意見を大切に聞き、みんなで考えていくために、ハンドサインを取り入れました。意見を聞いた後に、分かる(パー)、分からない(グー)、ちょっと分からない(チョキ)を出し、自分の理解度をみんなに伝えるようにしました。また、隣の子と意見を確認したり、説明したりする時間も取り入れ、全員が分かることを目指しました。慣れてくると「説明します。」とすぐに手が挙がり、自分の言葉で説明をしようとする子や「ここが分からない。」と言う子が出てきた。友達の意見を聞いて分かった時には、一斉に「あ〜！」の反応の音が響き、笑顔も見られました。

友達と学ぼう！～授業で見られた笑顔～

(1) 国語「お手紙」のなりきり音読劇

国語の「お手紙」の学習では、なりきり音読劇をするために、登場人物の気持ちや音読の工夫をペアで考える活動を取り入れました。交流時に意見を伝え合えるように交流の仕方を掲示しました。ペア音読の時、「ねえ、ここは怒っているように読んでみたら。」「むずかしいよね、ここ。ちょっとだけ怒っているんだよね。」など2人で話し合う姿や笑顔で「もう1回読もう。」「もう少し優しく読もう。」と練習する姿が見られました。



また、上手だったペアに音読をしてもらった時、「はい」と一人の子が笑顔で手を挙げました。音読を聞いてすごいと思ったことを言いたくなって、自然と手が上がったようです。友達から学ぶ楽しさを感じていた証であると思います。

(2) 算数「かけ算」の授業

かけ算の 12×3 の計算を考える学習の時、自分と違う考え方で理解できない子がいました。すると自分たちで解決しようと話し合いが始まりました。

「 12×3 を 3×12 にしても答えは同じだよ。ここまでは分かりますか。」「うん。」「 3×9 までしか習ってないから・・・。」「まだ、～が分からない。」と。

分かった瞬間、多くの子が「ああ、そうか!」と笑顔になりました。ある子の感想には、「みんながたくさん意見を言ったから、今までの算数の中で1番楽しかった。」と書かれていました。

一人一人の自信へ

12月のアンケートでは「意見を言えるようになったか」に対して、96%の子ができたと答えました。その理由の多くが「友達が反応してくれるから、伝えるのが楽しくなった」ということです。一人一人の意見を大切にできたから、子どもたちの自信へとつながったと感じます。聞き合うことが、友達と学ぶ楽しさとなり自信を高めたと考えます。これからも友達から学ぶ楽しさを感じる授業を子どもたちと共に創っていきたいと思います。

「伝え合う子」の実現を目指して

中央小学校 松浦容子

「伝え合う子」の実現を目指して

「聞いて！聞いて！」「ここにこう書いてあるから、答えは絶対こっちだよ！」「今の説明、すごくわかりやすい！」「ここまではわかったんだけど、ここからどうやって説明すればいいの？」「私、続きの説明できるよ！」

本校の研修テーマは「伝え合う子の育成」です。「教材と真剣に向き合い、一生懸命つくり上げた自分の考えをみんなに聞いてもらいたい！」そして、「友達の考えも聞きたい！」そんな子どもたちを目指して、日々の授業づくりに取り組んできました。研修テーマ実現のために、研修の重点を「意図的な『思いや考えを伝え合う』場の設定」とし、研修を重ねてきました。国語科を中心に、単元を貫く言語活動を意識しながら、子どもたちが思わず伝え合いたくなるような場の設定を工夫しました。

視覚化を生かして「伝え合い」を生む

4月に学級の子どもたちと出会った時、まず感じたことは「すごく素敵な考えをもっているのに、伝えられないでいるのはもったいない！」ということでした。教師の投げかけに対して前向きに取り組む素直さがある反面、伝え方に自信がもてず、せっかくつくり出した自分の考えを伝えられないでいるのは残念だと感じました。

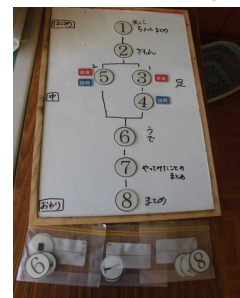
そんな子どもたちの「伝え合い」を活発にするには「教材が目に見えて、直接作業しながら話し合える場」（視覚化）の設定が有効なのではないかと思いました。

以下、学年で話し合い、試行錯誤しながら取り組んだ3つの実践を紹介します。

1 段落構成図をつくらう～「動いて考えてまた動く」～

教材の特徴である「結論（問題提起）→事実と考え（説明）→結論（まとめ）」の構成を捉えるために、段落構成図を利用した読みに取り組みました。

班にホワイトボードと段番号を配布し、班で話し合いながら段落構成図を作りました。段落番号が動かせるので、何度でもやり直しが利き、話し合いが盛り上がりました。「このようにって書いてあるから、こっちの段落と同じまとめじゃないかな。」など、本文を根拠に様々な考えを出し合う姿を見て、「伝え合い」の姿に一步近づいたと感じました。



2 「心情曲線で新美南吉作品を語り合おう」～「ごんぎつね」～

ごんの心情を心情曲線に表し、それを基に話し合う活動を行いました。心情曲線は、「上がるか」「下がるか」という選択制となるため、意見を持ちやすく、伝えやすいという利点があります。また、心情曲線をかき根拠となる本文に線を引き、

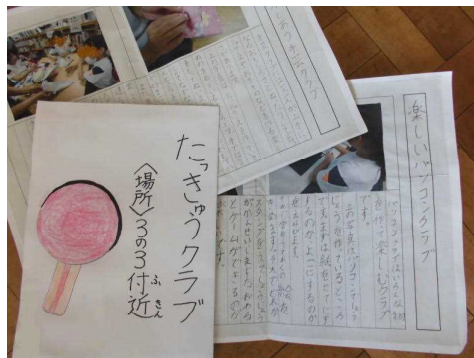
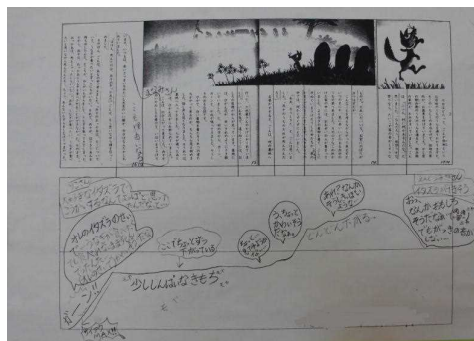
それを基に話し合うことは、叙述に返って伝え合うことにつながります。

普段、自分の考えを伝えることに消極的なKさんも、自分が一生懸命かいた心情曲線については伝えたくて仕方がなかったようです。グループでの話し合いでは、生き生きとした表情で自分の考えを伝えていました。

3 アップとルーズでクラブ紹介リーフレットをつくろう ～「アップとルーズで伝えよう」～

本教材の特徴は対比のわかりやすさです。

そこで、対比に気づかせたい2つの段落を上下に並べたワークシートを配布し、自由に書き込めるようにすることで、班のみんなで本文を囲んで話し合いができるようにしました。視覚的に文章構成に気づきやすく、ゲームをするように楽しく話し合いを進めることができました。



視覚化は主体的な読みにもつながる

長文の教材文が苦手な子にも読んでほしい。そういう思いから、教材「ごんぎつね」の取り組みでは、心情曲線を取り入れた読み取りを行いました。ごんの気持ちを心情曲線に表すために、感情を表す表現をヒントに長い文章を自分の力で読み進めました。普段、文章を読むことが苦手な児童が、必死に文章を指でなぞりながら読み進める姿は、まさに「主体的な読み」を行う姿でした。

また、「アップとルーズで伝えよう」の導入でも、視覚化の有効性を感じる出来事がありました。おおまかな内容を掴む際に、「段落構成図を使えばわかりやすいよ。」と、子どもから声が出たことです。「動いて考えてまた動く」の学習で用いたことが生きていると感じました。これも、子どもたち自身が、文章の読み方を選択するという意味で「主体的な読み」であると言えるでしょう。

そして、「主体的な読み」は、「伝えたい!」「友達の考えを知りたい!」という「伝え合い」の意欲につながることを実感しました。

「伝え合う子」実現のための手立ての模索を

校内研修を通して、様々な学年の取組から学ぶことが多くありました。複数の中から話し合いで1つに絞っていく「選択」や、教師による切り返しによる話し合いの「焦点化」など、伝え合いを活発にするための手立ては様々です。これからも、ある授業者の言葉「話し合いを子どもに任せる教師の姿勢」を大切にしながら、子どもたちの伝え合いの質を高めるための手立てを模索し続けたいと思います。

「自分の思いや考えをより良く表現できる子」の育成をめざして

曾我小学校 神谷 耕平

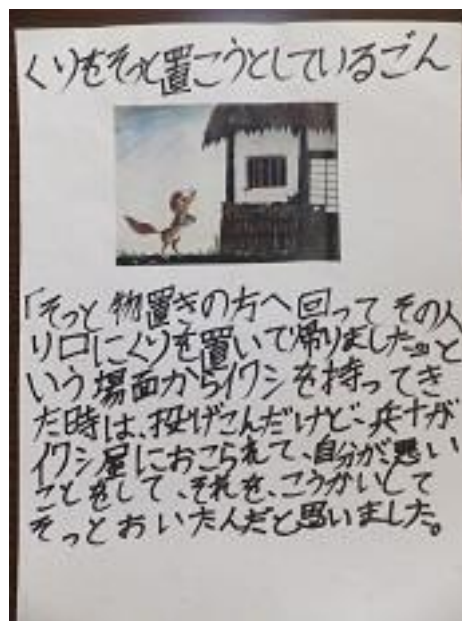
はじめに

本校では、本年度より「自分の思いや考えをより良く表現できる子の育成をめざして」を研修テーマに据え、研修を進めてきました。ここでは、年間3回行った中心授業の中でも、4年生の国語科「ごんぎつね」の実践について紹介します。

目標を明確にした授業構想

授業づくりの基本として、目標を明確にすることはとても大切なことです。本校の校内研修では、はじめに国語科の学習指導要領の内容を読み解き、確認することから授業づくりを始めています。「この学習でお互いに認め合える集団の素地にしたい」という子どもの実態を基にした担任の願いから、4年生の「ごんぎつね」の単元では、国語科「読むこと」の指導事項オ「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」を中心に授業を構想しました。

目標を明確にしたり、表現するためにツールをはっきりさせたりしたことで、意欲的に学習に取り組んでいました。右図は実際に作成したポスターになります。ポスターは、絵と文章で表すことにしました。絵を見て自分と同じ場面でも違う場面でも選んだ理由を聞きたくなるものです。友達がなぜその場面を選んだのか「聞いてみたい」という意欲が引き出され、対話から深い学びへとつながりました。



読みの違いを生かした対話的な授業形態

指導事項オを実現するための授業形態として、主に4人グループで学習を進めました。これは、子どもたち一人一人の読みの違いをより詳しく説明し合うことをねらったからです。具体的には、「ごんぎつね」の全文から自分が「心に残った場面」を選択し、それを説明し合い、グループにおける「心に残った場面」を決定するという展開としました。自分の「心に残った場面」について説明を繰り返すことで、子どもたちのより良い表現を引き出すことができると考えました。

あるグループでは、児童Aが、兵十がごんを銃で撃った場面を説明し終わった後、それを聞いていた児童Bが「兵十がごんを撃ったから選んだの？」と聞き返

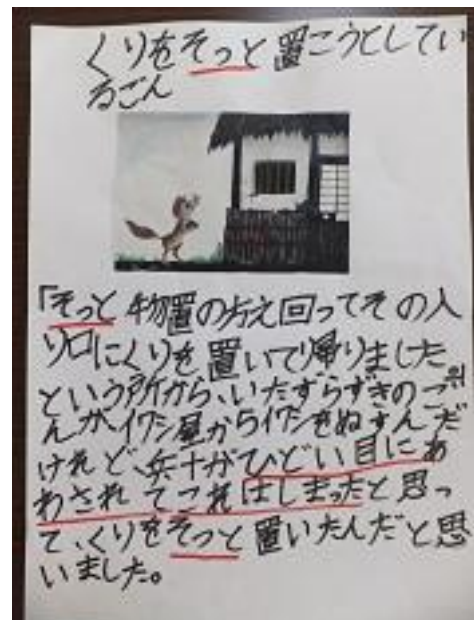


し、それに対してポスターに書いていない「兵十がひどいと思ったから。」という言葉で説明するという対話の様子が見られました。このように、一通り説明を聞いた後で、「どうして」「なぜ」と聞き返すことで説明が深まります。授業後の検討会でも、このような対話をめざす必要があることを再確認しました。

読みの変容を実感できる単元展開

子どもたちの「ごんぎつね」での「心に残った場面」は、実に多様です。同じ場面でも、その表現の仕方は一人一人違います。グループの中で説明し合ったり、全体で共有したりした後で、もう一度「心に残った場面」を考え、交流する時間を設定しました。この時間を設定することにより、子どもたちの「心に残った場面」についての読みが変容し、はじめに考えていたよりも深く読むことができるのではないかと考えました。

前述のポスターを作りかえたものが右図になります。ポスターの文章部分のアンダーラインや主人公の気持ちを文章で表すことで自分の「心に残った場面」について2回目のポスターの方がより整理されているのがわかります。



より良い表現をめざした授業改善

単元の最後にとった子どもたちの学習のまとめからは、「一人一人の感じ方や考え方の違いについて気付いた」と多くの子どもの記述することができました。これは、単元を通した一連の手立てが実を結び、学習の成果として表れたのだと考えられます。ただ、授業実践を通して教師がねらっている表現を引き出せたかどうかはまだまだ課題が残ります。今後も、授業改善を繰り返し、子どもたちのより良い表現を引き出す手立てを考えていきたいと思えます。

「学んでいく子」を育成する授業 ～桜木型アクティブラーニングの実践を通して～

桜木小学校 大瀧 和美

変化の激しい社会にあって、重要となるのは「知識や技能」だけではなく、「思考力」「活用力」等の力です。本校では、子どもたちを主体的に「学んでいく子」へと育てることを教育課題としています。3年生の算数科授業の実践を紹介します。

〈桜木小の授業 柱1〉

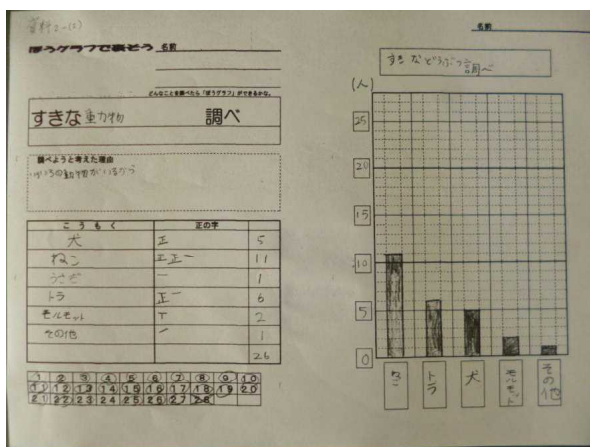
「追求したい」が継続する課題や問いの工夫 ～表とグラフの実践～

「表とグラフ」の単元では、まとめの学習で「友達にインタビューして棒グラフを作ろう」と課題を設定しました。子どもたちの生活や興味に近い課題にすることで「知りたい、やってみたい」と追求の意欲が増すのではないかと考えたからです。

個々にテーマを決め、学級全員にインタビューをしました。自分から話しかけることが苦手な子も、友達に話しかけられて質問や答えを繰り返すうちに、活動に慣れることができ、自分からも声をかけられるようになりました。

アンケートをして調べていくうちに、予想と違う項目があったり、その他の項目を変更したりする場面もありました。友達から「ウサギはその他に入ればいいよ。」などとアドバイスをもらったり、「予想と違ったからもう一回インタビューさせて。」と試行錯誤したりする姿も見られました。

作成だけでなく、できたグラフから学級での傾向についておのずと考察をし、友達と話し合う姿が見られました。



〈桜木小の授業 柱2〉学びの実感を得るための「対話」の工夫 ～対話タイムの実践～

授業で考えの交流を行う「対話タイム」を位置づけました。子どもが対話の相互作用を通して学び合うことで、一人一人が理解や思考を深化させ、学びの実感を

得られるのではないかと考えたからです。

まず内容に沿って話すことに慣れるように、定期的に「対話タイム」を行いました。

テーマを決めて互いに話し、それに対して質問をする形です。テーマは「好きな動物」「好きな教科」など誰でも答えられる易しいものにしました。子どもたちのふり返りからは、「〇〇さんと同じ考えだった。」「考えを知ることができてうれしい。」などと対話を楽しんでいる様子が見られました。そして、さらに質を高めるために「対話レベル表」を使い取り組みを継続しました。これにより、質問をするために注意深く聞こうとしたり、友達に意見を促したりする子が増えました。

| 対話レベル表 | |
|--------|---------------------------|
| レベル1 | ぜんいんが話す。 |
| レベル2 | 反のうしながらきく。(ひきだす言葉を使って) |
| レベル3 | しつ問↓答える、ができる。 |
| レベル4 | 話をきいた後、かん想や考えをつたえることができる。 |

～円と球の実践～

「円と球」の単元では、算数的な考え方を扱う時間において課題を提示したあと、個人追求を行わずにグループでの追求を「対話タイム」として行いました。考えを一緒に作る協同的な学びをさせたいと考えたからです。

第4時の「コンパスで距離を比べよう」の学習では、グループごとに一つの地図を用意し、「どのポストが一番近いか、コンパスを使って比べよう」と投げかけました。あるグループでは、コンパスで長さを調べることはできたが、それを比べる方法で迷いが生まれました。グループ全員のコンパスを使い、直線の道の方が三角形の道よりも長いとわかりましたが、正確さに疑問がのこりました。そこで「直線に長さを写しとる方法」を見つけたグループから方法を教えてもらい、コンパス1本でできることに気付くことができました。



終わりに

子どもにとって身近な題材や、興味の高い内容を課題にすることで、学習に対して「追求したい」の意欲が継続しました。対話を楽しみ、友達と学び合うことで、理解や思考が深まり、学習の実感を得られました。今後も、桜木型アクティブラーニングの実践をより深め、主体的に「学んでいく子」を育成するため研修を続けていきたいと思えます。

「地域の太陽」をめざして

和田岡小学校 安間 和美

1 めざす我が校の子どもの姿

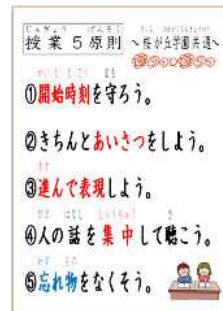
本校では、子どもたちが主体的に深く考えて学び合う姿を目指しています。そのために、「わかった!」「楽しい!」「できた!」と思えることができるような授業づくりをこころがけています。

そのために、「授業5原則」と「学びのUDわだおか支援」をベースとして、授業づくりに取り組んでいます。

「授業5原則」は桜が丘学園として統一して取り組んでいます。授業に臨む上での気持ちを子どもと学校、家庭が同じように意識付けています。

どの子どもも「分かりたい!」「できるようにになりたい!」と考えています。だからこそ、安心して自分の考えを発言できたり、友達と協力しあって課題を解決することができたりする、あたたかい人間関係がある学級経営を心がけています。

併せて、「めざす授業像」を子どもたちと話し合い、「自分たちで授業を作っていく!」という意識づけを行っています。年間を通して、めざす姿に立ち返り、学級の成長とさらに伸ばしたい点について定期的に振り返っています。そして、子どもたち自身が主体的に深く考えること、友達と協働的に学び合うことができる授業づくりをめざしています。



2 子どもたちの学ぶ意欲を大切に

「このごみをそのまま燃えるごみに捨ててきます。」
「え〜!」ある日の授業の導入です。授業者の持つ、ビンや缶・ペットボトル・トレーや古紙まで混ざっているビニル袋に視線が注がれます。

「分別しなくちゃ。」「そのまま出すなんてだめだよ。」
「ごみを出すきまりがあるでしょ。」子どもたちは口々に意見を言います。

「じゃあ、ごみを出すときに気をつけることは何だろう?」教師の問いかけに、子どもたちは実生活と結びつけて考えます。多くの子どもたちは、分別して資源として再利用することに気がつきます。

授業者は、ここでさらにもう一つの視点で考えてほしいと願い、次の資料を提示しました。

「この人たち、手で仕事をしている。」「何で手袋もしてるのだろう?」「いろいろ混ざっているから、手で分別しているのかな?…」今まではごみを出してしまえばそれで終わりという意識だった子どもたちが、ごみの行方と、そこに関わっている人たちにも、思いを馳せています。「しっかり分別していれば、こんなこと必要ないのにね。」「…でも、ちょっと分別しないで出しちゃったこともあったな…」自分たちの生活と結びつけて真剣に考えます。

この授業をやる時に、「先生、去年調べたんです。」とクラスの児童が以前、夏の研究で調べてきた写真を活用しました。Aさんが自由研究で実際に見聞きしたことを、クラスの友達に話してくれます。子どもたちは真剣に聞き入り、思いが深まっていきました。



3 学びから始まる、子どもたちの主体的な姿



ある朝、子どもたちがビニル袋を持ってきました。「先生、通学路にごみが落ちていたんだよ。」「昨日の帰りに、みんなで拾ったんだ。」「今日もまた落ちていたら、拾おうと思うんだ。」

社会科の授業や総合的な学習の時間に環境について考えてきた子どもたち。昨年から自主的に登校時にごみひろいをしてくる友達の活動に、触発されたようです。自分たちにできることは何だろうか、と自主的にごみ拾い活動を始めました。



「学習発表会があるから、そこで地域の人とか他の学年の人に呼びかけてみようよ。」「ごみだけでなく、水のことも学んだから、それも伝えよう。」「原野谷川に行って分かったことや蛍のことも伝えよう。」思いはどんどん膨らみます。



資料を活用しながら分かりやすい説明を考えます。実物があった方がいいだろうかと集め始めます。話す速さ、使う語彙、低学年でも楽しく知ってもらうためにクイズの導入…。子どもたちは次々にアイデアを見つけます。

互いにアドバイスをしあい、よりよいプレゼンテーションになるように協働的に活動する姿が見

られます。このように子どもたちが主体的に学び始めると、大きなパワーを生み出します。

今でも、ごみ拾いは継続して行われています。「地域を大切に作る心」は、地域の人からたくさんお話を聞いて、その願いを受け取った表れでしょう。



4 授業づくりは、「チーム和田岡」

先程のごみの授業では、「どうしたら子どもたちが意欲的に学ぶことができるだろう。」「どんな資料を提示したら、子どもたちの視野が広がるだろう。」ということについて、授業者と他の職員と協議します。

「子どもたち自身が『おおっ!』という気持ちになる導入なら、意欲的に話し合うかな。」「高速道路のSAのごみ箱が、分別されている資料を提示しようか。」「でも、それではインパクトが薄いよ。」「実物の方がいいだろうか。」「この单元だけで学びが終わらないように、カリキュラムマネジメントを考える必要があるよね。」…授業の構成を練り上げていく職員の話し合いは研修時間だけでなく、放課後の職員室でも行われています。明日の授業について、これからの单元について、今後、授業でお招きしたい地域の講師について…。話題は尽きません。

和田岡小学校は、全学年単学級の小規模校です。だからこそ、子どもたちを育てていくのは「チーム和田岡」です。全ての教員が、一人一人の子どもたちの「分かった!」「楽しい!」「できた!」ときの笑顔のために。日々の授業のアイデアを出し合い、知恵を集め、積小為大の教えを胸に。

今日も、これからも「地域の太陽」である学校を目指し、我が校のものがたりは続いていきます。

主体的に学び合う子どもの育成

原谷小学校 中村 美由紀

本校の研修主題「主体的に学び合う子どもの育成」に迫るために、理科を研究教科として授業実践を行いました。4年生は、自分の考えを発表したい、興味を持って友達の発表を聞きたいという思いを持っている子どもが多くいます。また「なぜ、〇〇なのかな。」「どうしてそうなるの。」という疑問を持ち、なんとか解決しようと思いつき積極的に取り組む子が多いです。

理科の授業において、子どもたちの好奇心を刺激して問題解決的な授業づくりをすれば、本校が目指す姿である「主体的に学び合い、確かな学力を身に付けた子」に迫ることができると考えました。そこで以下の3点に力を入れた授業づくりに取り組みました。



1 「やってみたい」「知りたい」と思える仕掛け

まず初めに、導入部分でいろいろな現象を見せることにしました。「電気のはたらき」では、乾電池を使って、個々にプロペラを回す活動をした。回路を作ればプロペラが回り、次第に「もっと早く回したいな。」「電池を2個使ってもいい？」などのつぶやきが出てきました。また「物の体積と温度」では、試験管の口に石けん水の膜を張り、握ることで膜が膨らむ様子を観察しました。すると、「あっ、膨らんだ!」「どうして膨らむのかな？」などのつぶやきが出てきました。こうした気付きや問いを『もっと〇〇するにはどうしたらよいか。』『〇〇してみると、どうなるか。』などの発問として、問題解決の授業になるよう工夫しました。



2 問題解決の過程を大切に

問題解決の過程は、①問い②計画・予想③観察・実験④結果⑤考察です。問いが明確になることで、解決のための見通しを持ちやすく、子どもたち自身が観察や実

験の手順や着目することについて考えることができました。そして、一人一人に予想を持たせることと、結果をきちんと残すためのノートづくりも大切にしました。予想、計画、結果記録のノートづくりが全員できた上で観察・実験を行うことで、どの子ども主体的に観察・実験に取り組むことができました。

さらに、観察・実験の結果をもとに考察したり、理科的な言葉を使ってまとめをしたりしました。そして、生活との関わりについて考える時間を取りました。朝の会で天気予報を話題にして日中の気温の変わり方を予想したり、光電池が使われている身近な物を話題にしたりして、理科の学習が生活と結びついていることを実感することができました。

3 子ども同士が関わる場の設定

実験をするときに、個々で教材があっても実験を分担して行ったり、器具を共同で使用したりして、子ども同士が関わるように工夫しました。検流計をペアで使用するときにはつなぎ方を教え合ったり、水を沸騰させる実験では計時や温度測定を役割分担して教え合いながら結果を記録したりしました。一人で実験することに不安がある子や個別の声掛けが必要な子は、友達と関わることで安心できたり、グループ内での責任を果たすことが自信につながったりしました。電気回路のつなぎ方や、月や星の動きなどが理解できている子は、進んで友達に教えたり分かりやすく説明させたりすることで、さらに自信をもつことができ、友達と関わり合う喜びを味わうことができました。



主体的に学び合いを楽しむ授業づくりのために

子どもたちの問いや驚きを出発点にして授業づくりを行うことで、子どもたちが課題意識を持ち、楽しみながら観察・実験をすることができました。子どもたちから、「実験って、楽しいね!」「今日はどうな実験なんだろう。」という声も聞かれ、子どもたちが意欲的に学習したいという気持ちを引き出すことができたと感じました。しかし、教師があらかじめ、付けたい力は何かを押さえておくことや、子どもたちの気付きやつまづきなどを予想しておくことが大切であるので、実態をきちんと把握して授業づくりに努めたいと思います。

国語科における指導の積み上げの大切さ

原田小学校 花嶋 留美子

単元を貫く言語活動の質を上げるために

原田小学校では、国語科の単元構想を、1次、2次、3次で構成しています。

- | | |
|----|--------------------------------|
| 1次 | 学習の見通しをもつ。(単元の目標とゴールとなる活動を知る。) |
| 2次 | 付けたい力を意識して、教材文で学ぶ。 |
| 3次 | 2次で学んだことを活用して、言語活動を行い、力を付ける。 |

この3次構成を効果的に進めるために、1次で子どもの興味関心を高める「仕掛け」、3次の活動を支える並行読書、学習の見通しをもたせる掲示などに力を入れてきました。このような実践の積み上げにより、国語科に対する子どもたちの意欲は確実に上がってきたと思われまます。

しかし、研修の場では3次の活動の質がもう一步であったとき、「本当に子どもたちに国語の力が付いているという確信がもてない。」という声上がることもありまました。そこで言語活動の質を上げていくためには、3次を支える2次の学習のさらなる充実が必要なのではないかと考え、今年度の重点として取り組みました。

付けるべき力は何なのかもう一度確かめてみよう

「全文を捉えて読んでいく力が大切だとよく言われているが、本当に全文をざっくりと読ませるだけで良いのだろうか。それで力が付くのだろうか。」この疑問を解消するため、もう一度原点の学習指導要領に戻り、付けるべき力を確認するようにしました。指導要領には学年の発達段階に応じてきめ細かな指導を積み上げていくことが述べられており、高学年になったときに全文を捉える力を付けていくまでの地道な指導の必要性を感じました。この単元で身に付けるべき内容は2次で指導し、3次で固めるというイメージをもって学習を進めるようにしました。

3次につながる2次を意識した指導実践（5年 説明文教材）

- ・単元名 筆者の考えの進め方をとらえ、自分の考えを発表しよう
- ・教材名 「見立てる」、「生き物は円柱形」

この単元では、「**文章の要旨を理解し**、自分の考えを広げたり深めたりすることができる（読むこと（1）オ）」を単元の目標に、要旨をつかむための読み進め方を学習しました。

1次では、第1教材の短い文章を用いて、「要旨とは何か、要旨をまとめるためにどこに目を向けたらいいか。」を中心に学習を進めました。本文の構成と大切な言葉が手立てになる事を学んだ後、100字程度で要旨をまとめました。

2次では、第2教材の「生き物は円柱形」を第1教材の経験を生かして読み進めていきました。初め、中、終わりの構成から要旨がどこに書かれているのかをつかむように指導しました。この文章は、中の部分にまとめがあり、要旨をまとめる時にどこを最重要と考えていけば良いのか多少混乱してしまった子どもも見られました。しかし、筆者の最も訴えたいことが何かを考えるように助言することで、子どもたちは要旨をつかみ、100字程度にまとめることができました。文章の構成を考える訓練をしていることが要旨をつかむ上で役に立っていました。

3次では、新たな教材文を用意し、子どもたちに要旨をつかませるようにしました。2次までの学習が要旨をつかむ力を養っていたかを確かめる機会となりました。一人だけで読む教材でも、子どもたちは、文章の構成を頼りに要旨をつかむことができました。

中学年から積み上げてきた「初め、中、終わり」の指導が生きていました。指導の段階を踏んできちんと学習を積み上げていくことが新たな学習内容の習得に役立つことを実感しました。また、指導者が指導方法をきちんと考え、具体的な策をもつことの大切さも感じました。

確かな言葉の力を付けていくために

子どもの主体的な学びと意欲を喚起する3次構成の成功のためには、「子どもの意欲を高める1次、指導すべき事柄を着実に指導する2次、学習を定着させる3次」のどれもが欠けてはいけません。また、各学年の段階的指導が国語科でもとても大切なことを実感しました。子どもたちが豊かで確かな国語の遣い手となることを目指して、今後も学びの実感をもてる実践を積み重ねていきたいと思えます。

| 次 | 時 | 学習活動 | 言語に関する指導上の留意点 |
|---|---|---|--|
| 一 | ① | ○学習課題を確認し、どんなことを学習するのかをつかむ。 ○要旨とは何かを知る。 ○3次での活動を知る。 ○新出漢字の学習をする。 | ・紹介するための、説明的文章の本を読む必要を伝える。 ・「要旨」は初出の言葉であるため、54ページの「たいせつ」も参照して押さえる。 |
| | ② | ○「見立てる」を読み、文章全体の構成と各段落の役割について考える。 ○「見立てる」の要旨をまとめる。 ○文章全体の構成を確かめる。 | ・「初め」と「終わり」に筆者の考えが述べられ、「中」にそれを支える根拠や例が挙げられていることをつかませる。 ・全文を読みながら、自分が気になったところに付箋を貼る。感想を書くようにさせる。 |
| 二 | ③ | ○「生き物は円柱形」を読み、全文を読んで感想をもつ。 | ・構成の工夫など説明の仕方に着目させる。 |
| | ④ | ○書いた文を友達と交流する。 ○題と①段落、最後の段落に注目し、文章全体に關わる筆者の問いをつかみ、文章全体の構成を捉える。 | ・文末表現にも筆者の気持ちが表れていることに気付く。 |
| | ⑤ | ○筆者が読み手である自分を説得するためにどんな工夫をしながら書き進めているか見つける。 | ・「要旨」について再確認し、1次での学習を思い出して、キーワードを手がかりに要旨は何かを考えていく。 |
| | ⑥ | ○要旨のまとめ方を学び、この説明的文章の要旨をまとめる。 | ・「要旨」について再確認し、1次での学習を思い出して、キーワードを手がかりに要旨は何かを考えていく。 |
| | ⑦ | ○筆者の考えや考えの進め方について、自分の考えをもち、発表する。 | ・「要旨」について再確認し、1次での学習を思い出して、キーワードを手がかりに要旨は何かを考えていく。 |
| | ⑧ | ○自分の選んだ本（文章）の筆者の考えを捉え、自分の考えを書く。 | ・キーワードを捉え、要旨は何かを考える。 |
| | ⑨ | ○自分の選んだ説明的文章について、自分の考えを出し合う。 | ・前時に書いた文を用いて筆者の考えや論の進め方について自分の考えをもつて交流する。 |
| 三 | ⑩ | ○ふりくりテスト | |

単元構想

| 段階 | 学習活動 | 学習課題 | ねらい | 留意点 |
|-----|--|---|---|-----|
| つかい | ○学習課題を確認しよう。 筆者がいちばん伝えたいことは何かを考え、要旨をまとめよう。 | ○要旨とは何かを確認する。 | ○支度立評価⑥指導上の留意点 ○言語活動のための指導 | |
| 10 | ○要旨をまとめるために良い方法を思い出そう。 ●初めと終わりの段落を読む。 ●大切な言葉を使って考える。 ・全文を読もう。 | ○キーワードとして、いくつかの言葉を挙げさせる。キーワードは5個以下にする。 | ○「題名と同じ言葉」を繰り返して使われている言葉は既習事項。「文末表現から筆者の考えが強く打ち出されている言葉」は指導する。 | |
| 25 | ○大切な言葉（キーワード）は何かを話し合おう。 ●円柱形 ●多様 ●共通 ●強い ●速い ●進化 ●おそれ、うやまう ●実におもしろい 等 | ○例は何のために書かれているのだろうか。【仕】 ○初めは、150字にあまりこだわらずに書いて良いこととして書かせる。その後、見直しをさせていく。 | ○個人で要旨をまとめたらない子どもが多いようなら、時間を区切って作業を中断させ、誰かの文をもとに学級全体で考え、その後、もう一度個人学習に戻そうにしたい。 | |
| 30 | ○大切だと思う言葉を使って、150字以内で要旨をまとめよう。 ●「終わり」の文と同じ良いかな。 ●キーワードをぜんぶ使う必要があるかな。 ●初めと終わりをまとめた良いかな。 ・書いた文を覗き合せて、アドバイスを聞こう。 ●筆者の言いたいことが書けているね。 ●例を入れると文字数が多くなるから、初めと終わりの段落に書いてあることに絞ったらどうか。 ・アドバイスを基に書き直そう。 | ○要旨をまとめるポイントをつかみ、150字以内まとめることができたか。（プリント） | | |

2次の本時案（6/9）

自己肯定感を高め、個を強くする ～低学年の指導を通して～

西郷小学校 鳥山 ルミ

本学級（第2学年）の児童は素直で学習に真面目に取り組む反面、自分に自信がなく、授業中も受け身の姿勢でいる子が多く見られました。そこで、それぞれの児童の自己肯定感を高め、個を強くすることを本年度の目標とし、授業の場でも生活の場でも通用する『やる気』をもった強い人間力を育てる手立てを実践していきました。

1 出合いの時…自分で考えることは素晴らしい！

出合いの4月。「私は、宿題を忘れても怒らない先生です。」と伝えると、ほとんどの子が驚いた顔になりました。「今度はどんな工夫をしたら忘れないかを考え、行動することが大事です。考えられなければ、先生と一緒に考えます。失敗しても、大丈夫ですよ。」と続け、失敗しても自分で考えてどんどん行動すればいいんだということを印象づけました。それを実感させるためにも、児童が行った間違いや失敗に気づいたときにはすぐに指摘するのではなく、児童がそのような行動をとった理由を認め、「自分で考えてやれて偉かったね。」と、意識的に声をかけ続けました。

2 自分の頭を使って考えるために…なぜそうなるかを考える癖をつける。

(1) 鳥山大学…朝の会などで

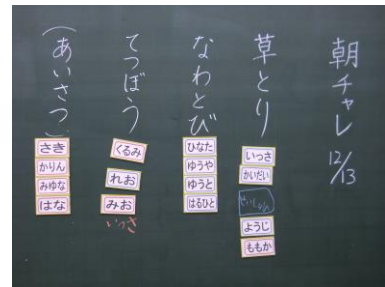
健康や安全、学習に関する話を、「大学レベルの難しい話だから、わかる人だけ聞けばいいよ。わかった人は、家の人にも教えてあげてね。では、今から鳥山大学を始めます。」と始めると、児童は、いつも以上に一生懸命耳を傾け、理解しようとしていました。繰り返し学習すると効果的だということは「忘却曲線」を提示して語り、時間を有効に使った方がいいよと伝えるときには「逆算」という言葉を、教室や廊下を走ってはいけないと注意するときには「危険予知」という言葉を教えながら伝えました。その他に、「コミュニケーション力」「内発的動機と外発的動機」「気化熱」「病気の潜伏期間」「風邪のうつるメカニズムと予防方法」「地震や台風の起こるしくみ」「命を守るということ」など、今の生活ではもちろん、これからも応用を利かせて自己判断できるように、根拠を示しながら話をしていきました。時には、走っているときぶつかったらどうなるかを、段ボールを机の角にぶつけて実験したり、咳やくしゃみの飛散距離を、ロープを使って示したりして実感させました。

そして、それを家の人に正しく伝えられた時、「すごいね。そんなこと知ってるんだね。大事なことだね。」と褒められ、その経験が次の「鳥山大学」を集中して聞く原動力となり、根拠を元に判断し、行動する癖をつけていくことにつながっていきました。

(2) 自己決定の場を多くする。

今、何をするときなのか、今、なにを頑張る時なのかを視覚的に明確に示しました。

たとえば、始業前の時間の使い方を、「朝チャレ」とし、朝、黒板に記して選択するようにしました。右に示す物のほかにも、持久走を付け加えるなど、その時々に応じて内容は変えていきました。児童は、今朝は生活科で世話をしている畑の草が伸びていたから抜こう、鉄棒の技があともう少しでできそうだから練習しよう、持久走の記録を伸ばしたいから走ろう、というように、自分で理由を考えながら自己決定して行動し、行動した後は、自分のネームプレートを黒板に貼り、充実感と達成感を味わいました。

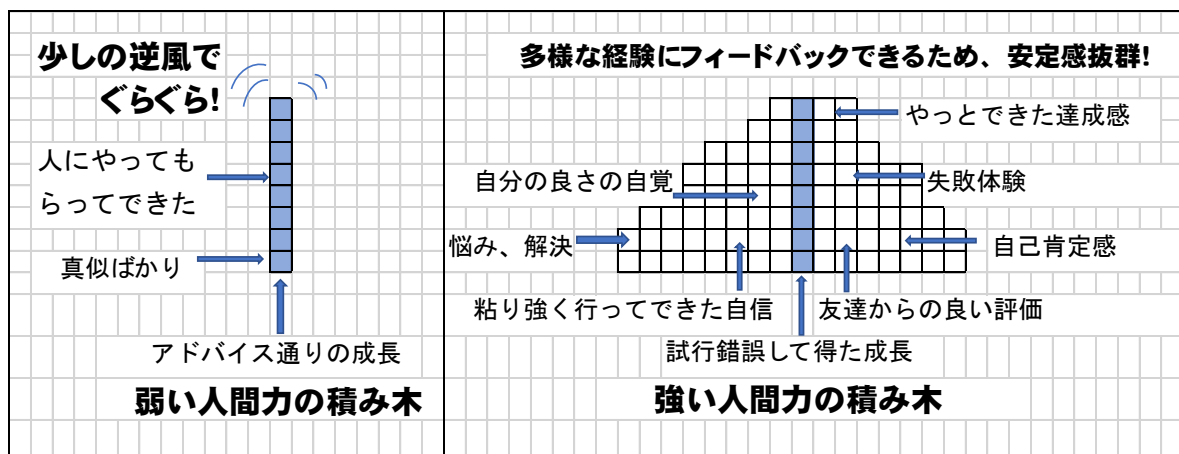


授業の場においても、興味のあることや知りたいことが見つかるに進んで家で調べ、次の授業で発表するということが、たびたび行われるようになっていきました。

3 レベルの階段・・・成功体験を積み重ねる。

学習内容をスモールステップで身につけ、成長していることを児童が実感するために、単元ごとに階段の絵を提示し、見通しと成長を視覚的に理解できるようにしました。また、既成概念とのずれから疑問や感動を生み出したり、クイズや間違い探しで知的好奇心を刺激したりするしかけを用いることが、挑戦する意欲へとつながっていきました。

4 「成長の積み木」のモデル図



児童は、自分で考えて行動できたことを褒められ、認められていくうちに、失敗してもいいから自分で考えて行動してみようという意識が芽生えました。そして、「困ったときこそ、成長のチャンス！」を合い言葉に、アイデアや工夫をすぐに実践に移す行動力が増し、機転を利かせた行動がとれるようになっていきました。聞き取ったことをメモしたり、先の見通しを持って行動したりするなど、様々な工夫が見られるようになり、それが学級全体に広がりました。授業においても、自分が間違えたところや、わからないことを堂々と言えるようになり、それをみんなで解決し、友達の成長を自分のことのように喜ぶ雰囲気が、学級の中に生まれていきました。

「説明する力」を高めるICT機器活用

倉真小学校 法月 淳

「説明する力を身につけた子」の育成

本校は平成26～27年度の2年間、掛川市教育委員会指定「ICT活用研究」に取り組みました。また、昨年度から本年度までの2年間は、文部科学省委託事業「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」（ICTを活用した学びの推進プロジェクト「指導力パワーアップコース」）の実証校でした。この間、本校は研究主題を「『説明する力を身につけた子』の育成～ICT機器の効果的な活用を通して～」と設定し、研究を進めてきました。

本校では「説明する力を身につけた子」の具体的な姿を、学年ごとに設定しています。低学年の具体的な姿は「友達に分かるように自分の考えをはっきり説明することができる子」。中学年の具体的な姿は「集団を意識し、自分の考えを伝えるために、図、表、物などを工夫して説明することができる子」です。

私は本年度、3年生を担当しました。3年生は低学年から中学年になり、目指す姿がステップアップします。そこで本年度は「ICT機器を効果的に活用することによって、集団を意識し、自分の考えを伝えるために、図、表、物などを工夫して説明することができるだろう」と仮説を設定し、研究を進めました。

「ICT機器の効果的な活用」の方法

3年生は、「お茶づくり」を主題に、総合的な学習の時間の活動を行いました。

地域の皆様の手厚いご指導とご協力に支えられ、4月の茶摘み体験や、10月の手揉み体験、11月のお茶の入れ方教室や利き茶体験など、充実した体験活動を行うことができました。また、6月には地元製茶工場のご協力で工場見学、7月には二の丸茶室において抹茶体験、10月には茶業試験場でお茶について詳しく学ぶことができました。



本校の総合的な学習の時間の発表会ではこれまで、主に高学年がプレゼンテーションソフトを活用した発表を行ってきました。

「集団を意識し、自分の考えを伝えるために、図、表、物などを工夫して説明することができる子」を目指すために、プレゼンテーションソフトは効果的であると判断し、今回はあえて中学年である3年生に挑戦させることを計画しました。

プレゼンテーションソフトの活用



「全部、自分で編集しました」



「前を見て堂々と話しました」



「全員、1人で発表しました」

3年生はタブレットPCの扱いには慣れており、9月から始めたプレゼンテーションソフトの練習に意欲的に取り組みました。今までPCで何かをつくる経験のなかった3年生は、字を入力することにも苦戦しました。ICT支援員に協力していただきながら粘り強く指導し、また、子ども同士もよく教え合い、楽しみながら徐々に技能を上達させていきました。

11月頃には、活動の様子の写真や、様々な特殊効果を生かして編集したプレゼンテーションが完成し、子ども同士で見せ合うようになりました。見ている人に伝わりやすくするという視点で、編集方法や話し方などについて互いに意見を出し合い、よりよい発表になるように修正を進める姿がよく見られました。

12月の本番では、多くの児童と地域の方の前で、1人1人が、自分のテーマについて、自分で編集した資料をバックに、タブレットPCを操作しながら、堂々と説明することができました。「とても満足したけれど、次はもっと上手にやりたい」という内容の振り返りがとても多かったことが印象に残りました。

説明したくなる意欲を高めるICT

プレゼンテーションソフトを活用したことは「集団を意識し、自分の考えを伝えるために、図、表、物などを工夫して説明することができる子」を目指す手立てとして大きな効果がありました。特に、子どもたちの意欲を引き出す効果は絶大でした。資料の内容や説明方法など「質」の面はまだまだこれからですが、もっと上手になりたいという子どもたちですから、今後の指導によって、どんどん高まっていくことは間違いないと確信しています。更なる成長がとても楽しみです。

「学習を楽しみ、学力を付ける子」 の花を咲かせよう

土方小学校 岩倉 智子

「学習を楽しみ、学力を付ける子」の花を咲かせるために

平成28年度の教育課程編成において、「学習の意義が分かり、各学年の基礎的・基本的な学習内容と態度を定着させようとする積極的な学習参加と、互いに切磋琢磨して学習する共同体意識を持つ子」を目指す児童像として掲げました。

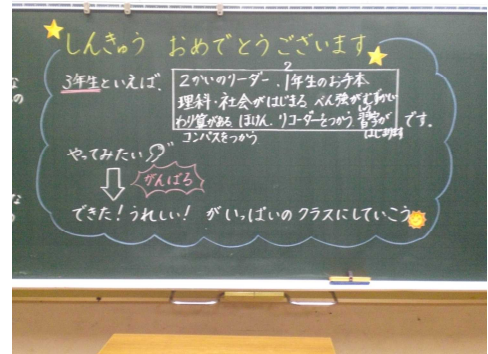
本校の我が校ものがたりでは、「学習を楽しみ、学力を付ける子」を花に例え、花を咲かせるための成長過程①土壌づくり・種蒔き ②芽吹き・成長 ③開花をものがたりとして展開していきました。

「土壌づくり・種蒔き」の期

土壌づくりでは、生徒指導と連携しながら、一人一人が安心して学校生活を送り、自分の力を思い切り発揮できる環境をつくっていきました。そのために、全学年が「土方小学校学びの約束・ルール」を活用して、子どもも教師も学習するための土壌を一緒に作り上げていきました。

種蒔きでは、学級開きや授業開きで、どんな学習をしていくのか、話す・聞く・書くスキルはどこまでできるようにさせたいか等、1年後の具体的な姿を示すことで、「今年の勉強は楽しみだ」「もっとできるようになりたい」という子どもの思いと、教師の「学習を楽しみ、学力を付ける子」のイメージを共有しました。

また、「どうして勉強するのか」という問いに対し、教師間で話し合う場を設け、その意義についてあらためて問い直し、子どもたちに付けたい力を再確認していきました。



「芽吹き・成長」の期

芽が出た後、成長に必要なものは、「日光」と「水」です。植物の成長を促す「日光」は「日々の授業改善」、成長のために自ら吸収する「水」は「学習スキル」となります。

日々の授業改善としては、構造的な板書づくりと誰もが考えたいくなるような学習問題づくりによる、ユニバーサルデザイン



を重視した授業づくりに取り組みました。また、自分の考えを深めるための協働的な学びになるように、自分の考えや友達のことを説明したり、話し合ったりする交流の場を取り入れました。

学習スキルとしては、「土方小学校学びの約束・ルール」を元に子どもたち自身が自分を振り返ると共に、子どもたちの実態に合わせて、指導の重点を決め、学校全体として取り組みました。「話す・聞く・書くの名人表」も活用し、目指す姿を子どもたち同士で意識させました。さらに、「土方小日記」や「ノート展」などを行うことで、書く力の基礎・基本を身に付けました。図書室以外にも本コーナーを設け、本に触れやすい環境を整えました。



＜名人表＞



＜土方小日記＞



＜ノート展＞



＜昇降口の本コーナー＞

「開花」の期

①土壌づくり・種蒔き、②芽吹き・成長を経て、子どもたちは、次のような③開花をしました。



「学習問題に向かって、自分なりの考えを持とうと真剣に考えようとする子」「自分の考えを分かりやすくノートに書こうとする子」



「発表や交流を通して、自分の考えを伝え、友達のことを分かろうとする子」など、様々な花がたくさん咲きました。

これからも、土方小の子どもたち一人一人が「学習を楽しみ、学力を付ける子」となるよう全職員と家庭と地域が連携して取り組んでいきます。

主体的に学び、「できた」「わかった」を

実感できる授業づくりを目指して

佐東小学校 永田 和輝

子どもたちは、落ち着いて話を聞いているように見え、昨年度は教室の外にいた子も、授業中に席に座っていました。4月当初、チャイム席ができていることを褒めると、子どもたちは、ますます時間を守るようになりました。姿勢がいい子を褒めたら、全員の背筋が伸びました。「静かに」と注意をしている子を褒めれば、お互いに声をかけられるようにもなりました。褒めるだけで、どんどんクラスが良くなっていくように見えました。

でも、そう見えるだけでした。ちゃんと座っているが、話は全く耳に入っていない子。分からないのに分からないことを言えない子。教室の中にいるけれど、ふて寝をしている子。その子たちを授業に巻き込むことができず、褒められる子は限られていってしまいました。そのせいで、もともと学力差があった学級に、学習意欲にも大きな隔たりができてしまいました。「全員を授業に参加させたい」と願いました。

全員が分かる発問を目指して

全員が「主体的に学んで」ほしい、全員に「できた」「わかった」を実感してほしい。そんな願いを実現させるべく、本校の研修主題である「学習課題・学習問題の工夫」に取り組んでいこうと考えました。

「問いの工夫」は、昨年度の自分の研修テーマでもありました。教師側の押し付けではなく「子どもは何を望んでいるのだろうか」という観点に立って、発問をつくっていくことの大切さを学びました。また、自分の課題は、発問が伝わらなかったときに、重ねて発問してしまうことで、その微妙なずれにより、子どもも何を考えたらいいか分からなくなってしまうので、全員が授業に参加できるようにするために、全員が分かる発問を目指していきたいと考えました。

そこで今年度は、発問を工夫する上で、3つの柱を考えました。①付けたい力の明確化②単元全体を見通したブレない発問づくり③構造的な板書づくり。この3つを意識すれば、全員が分かる発問に近づくことができるだろうという仮説を立てました。

子どもの実態に寄り添った単元構想へ

国語「スイミー」の授業では、私なりに、子どもに、文章をまるごと読んでほしいと考えて、単元を構想しました。単元全体を通して、「好きな場面のスイミーに手紙を書こう」、「スイミーに言ってあげたいことを考えよう」といった学習問題を展開することで、スイミーの心情の変化を捉えさせようとしてきました。



しかし、各段落から数多くの言葉を拾うと、子どもは、子どもたちは、文章のどこを根拠にスイミーに言ってあげたいことを書けばよいのか、分からなくなるだろうと感じました。単元全体がブレないようにということを意識しすぎるあまり、「想像を広げながら読む」という付けたい力に迫れず、子どもたちの実態にそぐわない発問になっていたことに気付きました。



そこで、段落を一つひとつ追っていく単元構想に作り直そうと考えました。全員が分かる発問にしたかったからです。

「スイミーは、なぜ、うんと考えたのだろう」「スイミーたちは、どうして大きな魚をおい出すことができたのだろう」という発問に変えました。段落を一つひとつ丁寧に読み進め、「スイミーって、どんな人物なんだろうね」というように投げかけると、今まで国語の授業で発表できなかった子たちの手が挙がり、意見を聞くことができました。当日の授業でも、子どもたちは、「うんとかんがえた」というキーワードに気づき、全員が発問に対して考えを持つことができました。

子どもの主体性を引き出す投げかけ

「ことばあそびをしよう」の授業では、子どもが授業に参加したくなるように、導入を工夫しました。まず絵を見せ、どんなお話なのか考えさせました。次に、短冊黒板を用いて、かきくけこ作文を順番に提示しました。



子どもたちの興味がわいたところで、「みんなで一つのあいうえお作文を作ってみよう」と投げかけ、全員を授業に巻き込みました。「すごく面白いお話にしようよ」「みんなで作るなら、ばびぶべぼがいい」「はやく自分のお話も作りたい」様々なつぶやきが聞かれました。クラスで一つの作品を作ったことをきっかけに、普段は集中力が持続しない子も、ふて寝をしていた子も、全員が授業に参加し、主体的にあいうえお作文を作ることができました。板書が、子どもの思考の助けになったと感じました。

全員が分かる発問を目指して、単元構想や、板書づくりに取り組んだことで、少しずつ、子どもたちが主体的に授業に参加できるようになってきました。しかし、まだ全員の子どもの「分かりたい」という思いに応える発問には程遠いと感じます。興味を惹きつけ、ねらいに迫るだけでなく、全員が分かる発問に近づくためには、さらなる授業研究が必要です。発問の工夫を通して、授業で勝負し、「主体的に学び、できた、わかったを実感する授業」を目指して、これからも取り組んでいきたいと思えます。

チーム中小 「できた」「わかった」がっばいの授業を目指して

中小学校 増田 七奈子

はじめに

4月の第1回目の校内研修。私は、研修構想図をもとに、今年度の研修の視点や方法を提案しました。

視点①単元を貫く言語活動の充実により、身につけさせたい力の定着を図る。

②課題からねらいに迫るために、適切な教師の関わりをもつ。

すると、職員から「重点がはっきりしない」の声が上がりました。そこで、再度自分自身で研修構想図を読み返してみました。そこには「適切な教師の関わりをもつ」ための方法として、学習問題、板書、個への支援、交流の場等いくつかの取り組みが明記されていました。いったいどこに力を入れていくのか…重点を明らかにするところから、今年度の研修はスタートしました。

重点は「発問」に

そして迎えた第1回目の授業研究。私が担任をする5年生で、国語「見立てる」「生き物は円柱形」を教材とし「要旨をまとめる㊦ブックを作ろう」という提案授業を行いました。子どもたちは、㊦ブックを作ることへの意欲をもち、2教材を同じ学習方法で進めることで見通しを持つことができていました。しかし、学習問題が子どもたちのものになっていなかったことや、切り返しや補助発問が適切に行われず子どもたちは広く浅くしか考えることができませんでした。

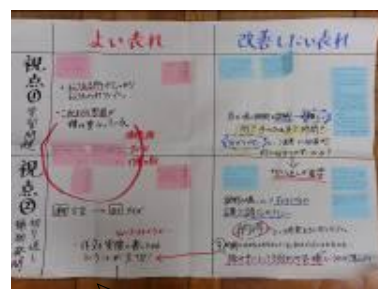
そこで本年度の研修の重点を『発問』にしました。子どもにとって必要感のある学習問題、子どもの「考えたい」「伝えたい」の気持ちを引き出し、焦点化しながらねらいに迫る切り返しや補助発問を目指してチーム中小の研修が本格化しました。

ベテラン・中堅・若手が一つになって

1 校内研修の積み重ね

授業研究の事前・事後研修では、「発問」に絞って協議を進めてきました。また、事後研修では毎回メンバーを変えてグループを作ることによって全職員が積極的に意見を言うことができました。

最後の授業研究となった3年生の国語「すがたをかえる食べ物のひみつブックを作ろう」では、身につけさせたい力につながる学習問題が提示され、子どもの意識を変える切り返しや補助発問が効果的になされたという成果が上げられました。これは、一つ一つの研修が



事後研修でのグループ協議

授業者だけのものだけではなく、チーム中小として全職員で「発問」という重点に向かって研修を積み重ねてきた結果だと考えます。



2 城東学園「授業力アップ」研修

今年度の城東学園研修は、本校が公開担当校でした。本校は単級であるため普段は学年に関係なく互いの授業について語り合っていますが、教材研究の共有に課題があると感じていました。城東学園内の小学校と、共に研修を行うことで、同学年の教師とチームを作って授業について考えることができ、通常の研修よりもより深く研修を行うことができました。さらに、中学校の先生の専門的な意見や違う角度からの意見、幼保の先生方の学習の構えについての意見も加わり、自校だけではできない研修の場になりました。

この研修では、温かい人間関係が授業の基盤となっていることが成果としてあげられました。一方で、子ども対教師ではなく、子どもと子どもの対話で授業が展開されるよう、自分の言葉で考えの根拠を書いたり話したりするための発問の必要性を学ぶことができました。

3 全教育活動の要となる道徳の時間

昨年度から行っている道徳の研修では、6月に道徳の授業における問題点や課題を話し合い、それらの解決を図るために視点を「発問の工夫」に絞りました。

そして、7月に筑波大学附属小学校の加藤教諭を授業者として招き、子どもが自分のよさに気付くための発問の在り方について学びました。さらに11月の一斉研究報告会での道徳公開授業に向けて、校内の職員と共に日々の道徳授業の向上を目指しました。

「いいと思うんだけど、それはなぜかな。」 「友だちレベルはどちらが高いのかな。」 など、自分たちで考えたい説明したいと思わせるテーマ発問型の授業への転換を目指してきたことは、他教科の授業の発問を考える上での基盤となりました。

教師が変われば子どもが変わる

学びづくり部で授業案について頭を抱えながら悩んだこと。放課後の職員室で授業について語り合ったこと。教師が変われば授業が変わる、子どもが変わる。

今後も、子ども自身が「できた」「わかった」を実感する授業づくりを行うために、チーム中小で研修に励んでいきたいと思えます。

自治的な能力を育む特別活動

大坂小学校 平野 裕亮

「自主性」について

『明鏡国語辞典』によると、「自治」とは、「自分や自分たちに関することを自身の責任で処理すること」とあります。本校では、重点目標「さあ、やってみよう みんなといっしょに」の下、子どもたちが進んで取り組む中で自分のよさを発揮することを目指しています。特に、特別活動（学級活動）は、子どもたちの自主的な態度を育てるのにつけての活動です。私は、この「自主的な態度の育成」が、そのまま子どもたちの自治力向上につながると考えています。

人によっては、「子どもというのは生まれつき自主的である」と考えるかもしれませんが。実際に、元から自主性のある子どもはいるのでしょうか。しかし、私はそうではなく、子どもの自主的な態度は、教え、育てていくものだと考えています。我が校では、「つくる」ステージで、学びのルールを身につけさせます。学びの土台作りをするのです。そのことと同じように、一からひとつずつ、丁寧に教える必要があることだと思います。そのような担任の考えのもと、4年生組（28人）の1年間がスタートしました。

集団⇔個

「集団があつての個」という観点で考えれば、自主的な態度は一個人の問題ではないことがわかります。チームワークを高める一互いに何でも言い合える人間関係を構築する一ことで初めて、子どもたちが安心して発言したり、行動を起こしたりできる環境が整うと思います。そこで、授業では、「わかる」授業づくりに向けて、自分の意見を交流する場を意図的に多く設けました。「さかせる」ステージでは、「男女2人ずつ」、「自分の班以外の異性3人」など交流する相手を指定し、学級内のできる限り多くの子どもと関わらせることで、みんなで学び合う活動ができました。『人間関係づくりプログラム』も積極的に活用し、「話す・聴く」を中心としたコミュニケーションスキルについて、みんなで考えました。学級会も「目指す学級像」を話し合うところから始めました。最初は教師が司会を務め、その後、「目指す授業像」、「運動会のスローガン」、「運動会のめあて」、「さんづけ」と、回を重ねるごとに子どもたちに任せる部分を増やしていきました。6回目の「2年生との交流遊び」で初めて計画委員会を設置し、自分たちの力で学級のみんなの意見を集約できました。

逆に、「個があつての集団」という視点で見れば、個を意識して取り組ませることが非常に重要です。授業では、「そだてる」ステージで、自分の考えることに力を入れました。分かりやすいノートづくりを通して、子どもに自分の考えを書かせることを重点的に行いました。子ども一人ひとりが自分の責任を自覚するという点では、日直でも、係活動でも、給食当番でも、そうじ当番でも、徹底的に「責任を果たす」ことを意識させ、できたことを認めました。個々人が責任を果たすと、気持ちよく生活できることに気付くので、自然に自主性は

芽生えました。そして、責任を果たした子どもを認め合うことで、信頼関係は強まっていきました。

“4星会”

私が担任する4年星組は、ギャングエイジ真っ只中。当然、学級の中で子ども同士の言い争いが毎日のように起こりました。担任である私に対しても「～さんが～してきた（嫌だった）」「～さんが～してた（いけないと思う）」という訴えがありました。そんなとき、私はその子の思いを十分に聞いた後、「じゃあ、みんなでそのこと考えようか。」と言って、学級全体の問題として子どもたちに投げかけました。みんなはどう思う？と。すると、こちらの想像以上に活発な話合いが始まるのです。「僕も同じことされて嫌だった」「私も見たけどダメなことだと思う」など、普段あまり発表をしない子どもも、自分の思いを次々と口にしました。その間、私の出番はほとんどありません。どこで終わりにするかを判断することぐらいでした。この話合いは、ことあるごとに行われていたので、ある男子の日記では、『4星会』とネーミングされていました。今思えば、この司会者のいない話合いはまさに、「自分や自分たちに関することを自身の責任で処理すること」そのものだったと思います。このことが、学習面にも生かされ、自分たちで学習の課題に挑戦し、解決しようとする姿勢につながっていききました。

自治は一日にして成らず

1年間の実践を通して、子どもたちに個々の責任を意識させることで、一人ひとりの中に「自分はこの学級の一員なんだ」という気持ちが芽生えました。同時に良好な人間関係を築く手立てを打つことで、たとえ責任を果たせない子が出てきても、その子を助けたり教えたりする子どもが現れました。何か問題が起きて、集団の問題として捉えさせることで、それをなんとか解決しようと、子どもたちから自然な話合いが生まれました。これらは、子ども側から起こったのではなく、教師が意図的に仕掛けたことで起こったのです。教えるところから始めて、任せてみて、気付かせて、また教えて、任せてみて、ほめて…といった毎日の積み重ねの中で、子どもたちは成長していききました。今後は、1年のうちのより早い段階で、子どもたち一人ひとりが、「この学級（学年・学校）は自分たちがつくっているんだ」と、毎日の充実感を感じられるようにし、進んで取り組み、交流する中で「できた、わかった」を実感できる学習につなげることが目標です。そして何より、自治的な活動が楽しいと思える子どもを育てていきたいと考えます。

ふりかえりシート

★今日の活動をふりかえって、あてはまるものに○をつけましょう。

1 今日の活動は、楽しくできましたか？

よくできた できた あまりできなかった できなかった

2 今日、習ったことがわかりやすかったですか？

とてもわかりやすかった まあまあわかりやすかった 少しわかりにくかった わかりにくかった

3 習ったことを学校や家でやってみようと思えましたか？

すくなく習った まあまあ習った あまり習わなかった 習わなかった

4 上手な動き方を学習して気づいたこと、感じたことを書きましょう。

「おたね」といってもらうと気分がよくなる。無しされちゃうと、つらい。かたい気持ちになる。友だちや、家族にもう一回試してみたい。こういうべんしょうはとほいいと思います！

ふりかえりシート

★今日の活動をふりかえって、あてはまるものに○をつけましょう。

1 今日の活動は、楽しくできましたか？

よくできた できた あまりできなかった できなかった

2 今日、習ったことがわかりやすかったですか？

とてもわかりやすかった まあまあわかりやすかった 少しわかりにくかった わかりにくかった

3 習ったことを学校や家でやってみようと思えましたか？

すくなく習った まあまあ習った あまり習わなかった 習わなかった

4 上手な動き方を学習して気づいたこと、感じたことを書きましょう。

友だちのかけつけ（ゆき）もともとふとくじょうぶになったと思えます。みんなであつたりしゃべったりするのがもっと楽しくなりました。ほい話そくと思いました。

主体的な学びを目指して

千浜小学校 渡辺 智美

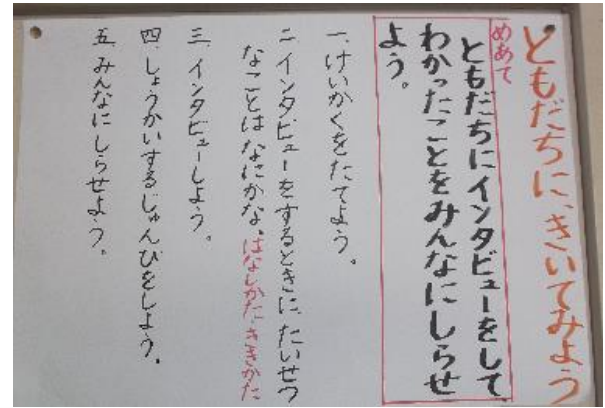
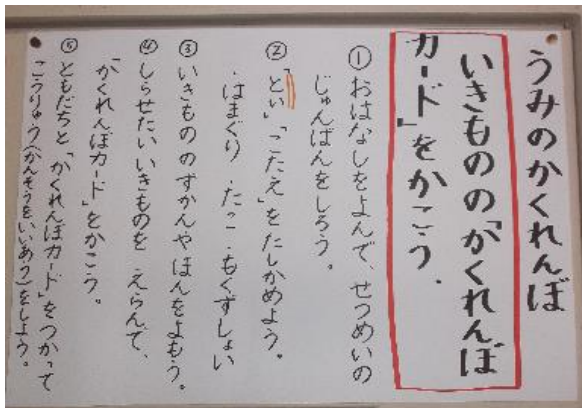
はじめに

1年生の担任になり、授業をしていく中で受身の児童がとて多く感じました。そこで、国語の授業を中心に、主体的に学び「勉強って楽しい。」「わかった。できた。」という思いをもてるような授業にしていこうと考えました。

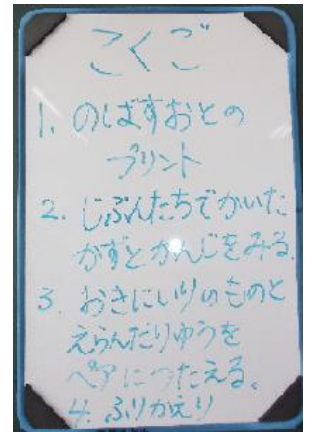
「押さえる。仕掛ける。確かめる。」のもとに実践したことを紹介します。

1 仕掛ける

(目標とゴールを明確にした単元構想や1時間の授業の組み立て)



新しい単元に入るときに、子どもたちとどのように学習を進めていきたいか、どんなことができたなら学習のゴールになるのかを確認しながら単元計画を作成し、教室に掲示しました。単元計画を掲示すると、子どもたちも「よし、新しい勉強が今日から始まるぞ。」とやる気いっぱいでした。また、毎時間何をやるのか、めあては何なのか、導入で確認するのが容易になりました。



ホワイトボードには、1時間の流れを書いた。教師の指示がなくても、1時間の中でどのようなことをするのかがわかり、集中して取り組むことができるようになりました。

交流

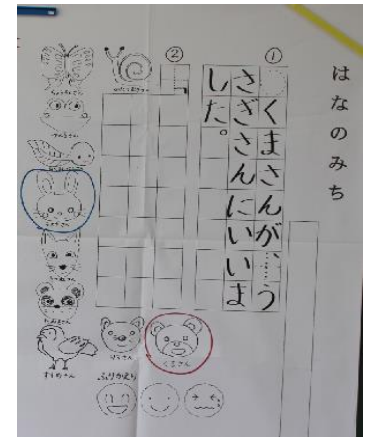
毎時間、ペアの交流を入れました。交流の視点をわかるように伝え、板書に残すようにしました。時間を区切り、ペアで話し合うことを主に行って来ました。「私はこう思うよ。理由はね・・・。」「ぼくも同じだ。でもね、理由が



ちょっと違うんだ。」と自然に会話を始められるようになりました。また、ペアの考えを自信をもって発表できるように、2人で発表するペア発表につなげました。

考えを書く

友達と考えを話し合うことがきっかけとなり、自分の考えがまとまったり、変化したりします。そのため、交流前や交流後に考えを書く時間を確保しました。まずは、教師の書く例文を真似して書くことから始め、考えを書くことに対する抵抗をなくすよう心がけました。短文でもいいので、自分の考えが書けたときには机間指導をしながら、花丸をつけて認めるようにしました。



2 確かめる、押さえる

授業の最後には、振り返りの時間をとりました。ひらがなの学習が進んでいないときは、顔マーク（全部わかった、少しわかった、わからなかった）で表しました。平仮名の学習が進み、文章が書けるようになってからは、1時間でわかったこと、わからなかったこと、できるようになったことについて書かせました。

3 成果と課題

単元計画をいつでも見える場所に掲示したことで、次の国語の時間を楽しみにする子が増えました。ホワイトボードで見通しをもつことで、「次になにやるの？」という質問は減り、「〇〇終わったら、次に進んでいいんだよね。」という意欲的な発言が増えました。「ここまでやったら、今日の勉強は終わり」と目で見て分かるので、集中力も持続するようになりました。

また、交流に慣れてくると、子どもたちも交流の時間を楽しみにしていました。タイマーを掛けると子供同士膝を向かい合わせて話合いが始まります。頷きながら一生懸命聞き取ろうとする子、2人の考えを1つの考えにまとめようとする子など、いろいろな反応が見られました。ペア発表では、普段自信をもって発表することができない子も生き生きした表情で話すことができました。誰が相手でも交流ができる、また4人グループでも交流ができるように話し方、聞き方の指導もしながら段階を追って指導していこうと思いました。

子どもの振り返りを読むと、「できた」と書いている子でも、「簡単だった子」「つまずいたけど結果的にできた子」と子どもの実態がよく把握できるようになり、次時の授業を組み立てるときに大いに参考になりました。自分の言葉で振り返ると、的確に自分自身を振り返っている子が多く驚きました。決められた時間の中で考えや振り返りを書く習慣を定着させるためにこれからも続けていきます。

主体的な学びのために、「押さえる。仕掛ける。確かめる。」授業を基本として続けていきたいです。

一人ひとりが輝き、意欲的に取り組める子の育成を目指して

横須賀小学校 湯川 雅世

子どもが輝く姿をイメージして

本校の学校教育目標は、「笑顔 夢 感動」です。この教育目標を具現するために、「みんなのキラリをふやしていこう！」を合言葉に今年度スタートしました。

何もかもが新鮮で、目をキラキラ輝かせている1年生。この輝きを、学校生活の中心となる授業でも見続けることができたのなら、どんなに素敵でしょう。

授業では、「話す」「聞く」「書く」活動が展開されます。子どもたち一人一人が、自分の考えを大きな声で発表し、相手の話をよく聞き、意欲的に授業に取り組む姿は、きっと輝きに満ちているのではないのでしょうか。国語科を中心に日々の授業の実践を重ねていくことにしました。

「話す」こと「聞く」こと「書く」ことって楽しいな

遊び中心の幼稚園生活から学習中心の小学校生活へ、初めての学習は興味津々です。まずは「楽しい！」「やってみたい！」と感ぜられるところからのスタートになるのではと考え、夏休み前まで実践しました。

「あさ」の学習では、「何を見つけましたか」「なんて言っているのかな」「みんななら、何て言いますか」など挿絵からイメージの湧きそうなことを多く尋ね答える場面を設定したり、どの子も声に出せるよう、個別に発言させるだけでなく、全体で自由に発言させる場面も設定したりしました。

「つながる」ことが「まるくなる」ことに通じるということに気がついた子の発言から、みんなで動作化して実感させてみました。子どもたちからは「本当だ！本当だ！つながったら丸くなっちゃった！」という声が出てきます。言葉の意味を体感しながら、また友達と一緒に楽しみながら学ぶ姿は輝いていました。

「好きなことなあに」の学習では、『自分の宝物と、なぜ宝物なのかを友達に話をして伝える』活動を行い、単元の最後には『自分で文を書く』ことを伝えました。自分の思いを言葉でうまくまとめられなくて困り顔になる子も見られます。「好きな〇〇は〇〇です。理由は〇〇だからです。」の基本パターンを押さえることで子どもたちは安心して話を始めました。繰り返し話すことで、「もっと話したい！」と子どもたちから嬉しい言葉が飛び交いました。

話をするのと文章を書くことは、イコールではありません。まだ平仮名を覚えたての子どもたちは、文を書くことに不安いっぱいでしたが、パターンを示すことでゴールが見え、話したことを文に書き起こそうとしていました。

「好きな物カード」をしばらく子どもたちに持たせると、休み時間に、友達同士でカードを見せ合いながら話をする姿が見られるようになりました。その姿も、もちろんキラキラと輝いていました。

「楽しい!」「やってみたい!」から「できた!」という満足感へ

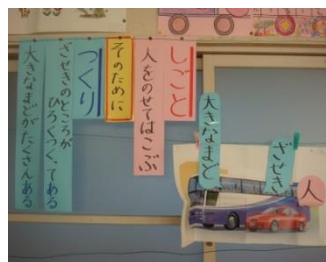
物語文や説明文の学習に入ると「楽しい!」「やってみたい!」の気持ちに陰りが見え始めてきました。「できない」ことが増えてきたからです。子どもたちは想像力豊かで自分たちの思いを自由に発言することは大好きです。ところが、文章の言葉に戻って読むことを苦手としていました。夏休み明けは子どもたちが「できた!」と満足感をもてるように実践しました。

「じどう車くらべ」の学習では、言語活動を「じどう車図鑑を作ろう」と設定しました。自分達で作った「自動車図鑑」を校内の図書館に置いてもらえるということで子どもたちの意欲は増しました。自動車の「しごと」「つくり」がよくわからないと、「これじゃあ、図書館に置けないよ」「図鑑にならないよ」など、図鑑にするためには何を載せなければいけないのかを、本文から読み取ろうとする子が増えてきました。



～図書館に飾られた
自動車図鑑～

また、学習計画を掲示することで、1時間ごと図鑑の完成に向かっていくことが目に見え、「今日のところができた!」と、子どもたちの輝きの持続には効果的でした。視覚的にも大切なことに気づかせるよう板書計画を立てました。言葉と絵を一致させること。「しごと」と「つくり」の違いに目を向けさせること。「しごと」がわかる文と「つくり」がわかる文は、色分けしました。「しごと」に関わる言葉と「つくり」に関わる言葉は、色画用紙で色分けして板書に生かすようにしました。自動車を図鑑に載せていくたびに、文の読み取りが苦手な子も色を手がかりに大事な文を見つけ抜き書きできるようになってきました。



～板書の掲示～

休み時間には、自動車の絵、「しごと」「つくり」「そのために」の短冊、「しごと」「つくり」に関わる言葉の書かれた画用紙を使って、子どもたちが自分達で話をしながら板書を作り上げる姿が見られるようになりました。先生役と子ども役に別れて、教師が発問したことを再現しているのです。とても生き生きとしていたことは言うまでもありません。

子どもの輝きパワーアップ!

自分の考えを大きな声で発表し、相手の話をよく聞き、意欲的に授業に取り組めるように何ができるか考えてきました。「楽しい!」「やってみたい!」から「できた!」という満足感まで味わわせてあげられたら子どもたちは輝くことができるのではないかと感じました。子どもたちのやる気は無限大です。子どもたちの輝きも無限大のはずです。輝きをくすませることがないよう、目の前の子どもたちとこれからも日々向き合っていきたいと思います。子どもたちの輝きがさらにパワーアップしていくことを目指します。

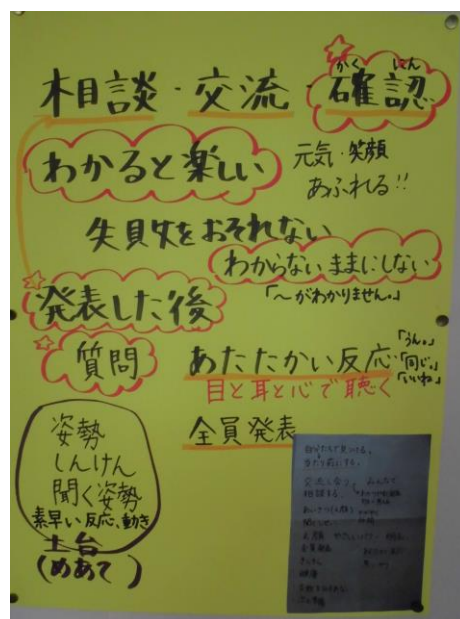
いきいきわくわく楽しく学ぶ子ども

大淵小学校 伊藤 愛

1 目指す授業像～学びの土台づくり～

4月、学級開きの次に行われるのが「授業開き」です。「みんなは、どんな授業を目指したい？」という担任からの投げかけに、子どもたちは口々に目指す授業像を語り合います。4年生は「分かると楽しい！」というSさんの一言から、「分かるためには分からないままにしない。」「分からないと堂々と言おう！」と声が続き、『失敗を恐れず、分からないままにしない、みんなと相談交流する授業。』という目標が定まりました。

学びづくり部からは、学びの土台づくりとして、「目と耳と心で聴こう。」「温かい反応をしよう。」が提案されました。第1ステージからしっかりと聴き方の指導をすることで、第2ステージからの深い学び合いにつながっていきます。



2 自分の考え（思い）をもつ

課題を解くための見通しがもてない時に周囲の友達同士で話し合う活動を「相談」、自身の考えを友達と確認し合ったり説明しあったりする活動を「交流」、出された意見を確かめ合う活動を「確認」と位置づけ、日々の授業に取り入れています。また、授業の中で、意図的に自分の考えをもつ時間を確保するようにしました。分かりやすく伝えたい気持ちがあり、考えをノートへ書くことが好きな子どもたち。じっくり自分の考えに向き合う時間を確保することで、多くの子が自分の考えをもつことができるようになりました。今まで考えをもたずに過ごしてしまってきた子たちも、「分かりたい」「知りたい」と行動へ移すことができるようになりました。

その結果、4月、発表者の投げかけに対し反応がなかった子どもたちが、第2ステージには「なんで？」「〇って、～だからかな？」「ここまでは、分かった。」「分かりたいから、教えて。」等自分の思いを語り出すようになりました。

3 授業を見合う週間（5年生を参観）

4月に掲げた『失敗を恐れず、分からないままにしない、みんなで相談・交流する授業』を目指して、4年生の子どもが5年生の授業を参観しました。

5年生、算数「約数」の授業。相談や交流をする際に教師の言動が邪魔にならないように、じっと教師は待ちの姿勢。子どもたちが苦手に行っているのは、一人が全体の場で自分の考えを述べた後の「確認」「交流」です。教師は「今の〇〇さんの考えを確認して。」「出された意見を検討して。」などの指示を出したり、ジェスチャーで促したりしながら、子どもたちが黙っていることがないよう繰り返し指導を行っています。発表者は、「ぼく（わたし）の考え、分かった？」「ぼく（わたし）の言ったことに質問はありますか。」など、聴き手が反応しやすいように投げかけます。すると、「分かりました。」「おお～。そうか～。」「え～。私と似てるけど、ちょっと違う」等、思い思いの言葉で反応が返ってきます。直後、近くの友達と今の発言に対してどう考えたか、「相談」や「確認」が始まります。

参観をして学んだ子どもたちは、早速「確認」を行うようになりました。さらに「なんでこうなるのか分かりません。」「誰か教えてください。」という声も出てきました。まさに学級が目指す「わからないままにしない。わかると授業は楽しい。」という姿です。

4 相談・交流から生み出される問い

質の高い「相談」や「交流」がある授業では、子どもからの問いが数多く出てきます。国語「一つの花」では、「一つの花とは、きっとコスモスのことだ。」「お父さんのくれた花がコスモスだからかな？」「教科書に書いてある？」という子どもの問いから、授業が始まり、深い学びへとつなげられました。

質の高い「相談」や「交流」を行うことで、子どもから問いを生み出すことができます。しかし、質の高い「相談」や「交流」を生み出すためには、よりよい課題が必要だと感じています。子どもにとってちょうどいいハードル。「頑張って解決したい。」「挑戦してみたい。」「みんなと一緒に考えたら分かるかもしれない。」と、子どもたちが身を乗り出して授業に取り組めるような魅力的な課題を提示し、子ども主体の授業づくりを目指していきたいです。

「学び合い やり抜く 栄中生」の実現へ

栄川中学校 細井 道浩

「講義型授業」に対する行き詰まり

「授業で分からないことがあっても、その場では恥ずかしくて聞けない。結局、最後までそのままにしてしまい、理解できなくて授業がつまらない。」

これは、本校の2年生の女子生徒が言った言葉です。アンケートによると本校の生徒は学習面での自己評価が低く、授業への意欲や家庭学習への取組において改善が必要でした。また、小規模校であることから、人間関係の幅が狭く、限られたコミュニティーの中で生活しています。

しかしながら、今後生徒が生きていく社会は、人と人との複雑に交わる、まさに予測不可能な激動の社会です。その社会をたくましく生き抜くためには、コミュニケーション能力の向上を図ることが必至の課題であると考えます。

そこで、本校では、教師が主導権を握り、生徒が受け身になる従来の「講義型授業」を見直し、将来必ず訪れる激動の社会を生き抜くための授業形態について考えました。



＜従来の授業形態＞

「学び合い型授業」への転換

生徒アンケートには前述した「学習面での自己評価が低い」という結果がある一方、「みんなで何かをするのは楽しい」「少人数だからこそみんな仲が良い」という意見もありました。そこで、この特長を生かして授業を組み立てようと、後期課程の始まりから授業改革を行いました。それが「講義型授業」から「学び合い型授業」への転換です。目指す生徒像を「子ども同士の学び合いが実現し、全員が学びに参加する姿」としました。

具体的な取組としては、授業における机の隊形を「コの字型」に転換し、お互いの顔を見て話せるようにしました。これは、その場でわからないことはわからないと聞くことができ、生徒のつまづきを解消できます。また、教師は、授業の開始10分程度で、生徒に時間内で解決すべき課題を与えます。そして、課題を解決するために、生徒はペアや3人から4人の小集団を作り、話し合ったり、分からないところを聞き、教え合ったりします。最後には、コミュニケーションを取りながら課題について考えたことを個人でまとめます。こうすることにより、全員が自然と授業に参加することになります。さらに、話し合い、助け合う中で、人間関係の幅が広がり、問題解決能力、主体性など、これからの社会で必要とされる能力が身に付いていきます。

以下が『学び合い』の実践の様子です。

＜英語＞



＜音楽＞



＜国語＞



「学び合い」を深める学習課題

「学び合い型授業」で最も重要なことは、学習課題の設定です。生徒が思わず解決したくなるような課題を設定しなければなりません。そこで、本校では学習課題を、①授業の初めに提示する「共有の課題」と②「共有の課題」を受けて応用する「ジャンプの課題」に分けました。ここで国語科の一例を紹介します。

3年生の『古今和歌集 仮名序』では、教科書の現代語訳を見ずに、自分たちの力で何が書かれているのかを考えました。個人で考える時間を十分に確保した上で、小集団で分からないところを教え合い、進めていきました。必要があれば、難解語句を辞書で調べたり、便覧を活用して歴史的な背景を見たりしている生徒がいました。ある程度意味がわかったところで、難易度の高い「ジャンプの課題」を提示しました。すると、生徒は自然と自分たちが考えた現代語訳の中から根拠を探し出し、ホワイトボードにまとめていきました。その後、各小集団の意見を全体で共有し、共通点や相違点について意見を交換しました。最後に、授業で話し合った内容について、自分で考えたことを付け加えて、紀貫之が何を伝えたかったのかを各自でまとめました。生徒は、授業後の感想で「最初は意味を考えるとすら難しいと思ったけれど、みんなで協力することで紀貫之が伝えようとしたことを考えることができた。」と書いていました。この感想から「学び合い型授業」は、個人ではなかなか考えられない課題も、仲間と協力して取り組むことによって解決できるようになることがわかります。

| | | | |
|------------------|---|---|--|
| 1 単元名 | | いにしえ歴史会を開こう ～和歌における語句の効果的な使いかたなど、表現の工夫に注目して読む～ | |
| 2 本時の目標 | | 「仮名序」の難解を克服する活動を通して、紀貫之が和歌をどのようにとらえていたかを探求することができる。 ・本調の中における語句の難解を的確にとらえ、克服することができる。 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 ア【ア】】 | |
| 3 本時の展開（1/4） | | | |
| 段階 | 学習活動 | ◎表現・国語力 | ■評価 |
| 交 換 さ る | 1 漢字テストを行う。 <1分> | | ◎読解力 |
| | 2 古今和歌集「仮名序」の難解を考えよう。 ① 本時の学習課題をノートに書く。【共有の課題】 ② 古今和歌集「仮名序」について説明を聞く。 ③ 書読する。【一斉 → ペア → 個人】 | | ◎読んだ「仮名序」を正確に理解する。【読解力】 ◎読んだ「仮名序」を正確に理解して、自分の言葉で説明できる。【表現力】 |
| | 3 小集団で「仮名序」に込められた難解を考える。 <個人 10分 → 一斉 10分> ・和歌は、人の心に響かせるものを作るものだ。 ・心で感じたり、気配をきたしたりするものを歌っている。 ・武士の心を動かすのが和歌だ。 | | ◎話し合いの場には、説明をつける。 ◎グループごとに発表を促す。 |
| | ☆ 紀貫之は、古今和歌集「仮名序」で、何を伝えようとしたのだろうか。 | | ◎グループで考えた「仮名序」の難解から考えさせる。【読解力】 |
| | 【ジャンプの課題】 | | ◎各グループで考えた意見を互いに聞きあうように促す。【共有化】 |
| | 4 各グループの意見を交換させる。 <10分> ・自分たちの考えとは、異なるところがある・・・ ・この部分は、自分たちの意見と同じだ。 | | ◎うまく聞けない生徒がお互いにどんなことが聞いてあったかを聞くことと良いというヒントを伝える。 |
| | 5 まとめる。 <2分> ☆ 古今和歌集「仮名序」には、どのような意味が込められていたかについて、自分の考えを書いてまとめる。 6 個人でまとめた意見を全体で共有する。 <2分> | | ◎紀貫之が和歌をどのようにとらえていたかを感じ取ることができる。【共有化】 ◎「ワークシート」で話し合いの場を促す。 |
| 7 和歌の平易を聞く。 | | | |
| 4 評価 | ① それぞれの意見交換した意見を個人でまとめることにより、個々のより深い学びにつながったか。【共有化】 ② あえて難解度の高い問題を提示することにより、集団での学びの必要性が生まれていたか。 | | |

「やり抜く」学習へのステップアップ

「学び合い型授業」を取り入れて、以下のような変化が見られました。

＜生徒の表れ＞

- ☆ 話し合うことが楽しくなって、人間関係が良好になった。
- ☆ 授業に参加しない生徒が1人もいなくなった。
- ☆ これまで分からないことをそのままにしていた生徒が素直に「教えて」と言えるようになった。
- ☆ 個人で課題を考え終わると、周囲を見て困っている仲間アドバイスできる生徒が増えた。



＜教師の表れ＞

- ★ 「ジャンプの課題」を取り入れることで、課題設定を工夫するようになった。
- ★ 生徒同士の関わりが生まれ、自分の力で考えるのを見守る余裕ができた。
- ★ 複数のミニ教師がいるので、個々に目を向けて支援する時間が増えた。
- ★ 生徒の「できた」「わかった」という実感を受け取りやすくなった。

本校は、今後も継続して「学び合い型授業」を追究し、生徒の問題解決能力を育む授業を実践していきたいと思えます。そして、困難に直面しても、自らの力で乗り越え、激動の社会を堂々と生き抜いていける生徒を育成していきます。

物語を再発見

東中学校 石野 裕子

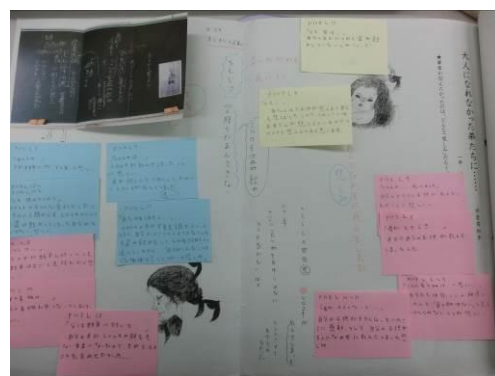
中学時代、私は授業が楽しくて仕方ありませんでした。なかでも私にとって魅力的だったのは、国語です。友達の読み方に触れて自分自身の読み方が変化し、授業の前後で作品の姿が少し違ってみえることが、何よりも楽しく感じられました。

同じ文章や詩歌を読んでも、心に留まる言葉は人それぞれ違い、考えることも様々です。だからこそ、学級みんなで読む意味があります。1人で読む時よりもたくさんの仲間と読む時の方が、作品の面白さを味わうことができるはずです。

それでは、1年生『大人になれなかった弟たちに……』の実践を紹介します。

完璧じゃなくていい。 考えよう、伝えよう。

授業では、「全員が自分の考えをもつこと」「考えを他の誰かに伝えること」の2点を大切にしています。その状況をつくりだすために、付箋を用いた交流が有効です。個人追究で考えを付箋に書き出し、続く小集団活動では、付箋をホワイトボードに貼ってグルーピングしながら話し合いを行います。



付箋はまとめて学びの記録に

〇〇（登場人物）は、どのような悲しみを抱えているのだろう。

という学習問題について自分の意見を示すため、どの生徒も一生懸命考えます。付箋に書くのは、単語でも良いのです。根拠がはっきりしなくても、小集団では友達が「もしかしたらこの言葉かな。」と一緒に見つけてくれます。考えをうまく言い表せなくても、気になる描写や言葉がメモしてあれば「どの意見が近いの。」「セリフで書いてみたら。」と一緒に悩んでくれます。友達との話し合いを通して、徐々に自分の考えも明確になっていきます。



ホワイトボードで話し合いを可視化

生徒が書く付箋の量は、展開が進むごとに増えていきます。付箋をきっかけに考えの交流が行われ、結果的に自分の理解が深まることを実感できたからでしょう。

聴いて、私の物語。 教えて、あなたの物語。

母の悲しみを捉える授業では、母が初めて見せた涙の理由が話題に上がりました。

なぜ母は、ヒロユキを棺に入れる時に「初めて」泣いてしまったのだろう。



自分の言葉で語る生徒

泣く直前に母が発した「大きくなっていったんだね」から、弟の成長が嬉しいのだという考えが出始めたころ、この言葉に納得がいかないと訴える生徒がいます。

「ご飯がほとんどないのに大きくなるわけないよ。あのね、今年生まれた弟がいるの。赤ちゃんって本当にか弱い存在だよ。」その生徒に「そうなんだ。…それなのに大きくなってたらどう思う。」と尋ねたのは小集団の仲間です。「信じられないし、驚く。」「嬉しいでしょ。」「ちょっと違うかも。悔しいというか。」「なんで、教えて。」この会話は、子供の成長は嬉しいものだから母は喜びの涙を流したのだ、と考えていた生徒たちの読み方を変えるきっかけになったのです。



「聴いてくれる」安心感

生徒はよく、自分の経験を交えて考えや思いを語ります。そして、自分では経験したことがない友達の話を聴くことが大好きです。文学作品の読み方には、経験がもとになったものの見方や考え方が色濃く反映されるので、生徒によって受け取る「物語」が少しずつ違います。お互いの「物語」を共有し、共感したり反論したりすることは、作品を味わい、深く理解することに繋がっています。

これからも、「みんな」で読もう。

ある生徒が書いた、まとめの感想です。

初めて読んだ時は、弟が死んじゃってかわいそうな話だなと思いました。しかし、みんなと授業をしていくと、作者自身の悲しみやお母さんの悲しみがたくさん見つかりました。弟の死の悲しみを一番目立たせているけれど、その裏にはたくさんの悲しみがありませんでした。（中略）授業を終えて、自分は幸せだと改めて思いました。私には家族がいて、友達がいて、先生がいて、地域の人があります。私は今、ほんとうに恵まれています。

初めは気づけなかった物語の側面が見えてくること、それは物語の再発見です。学級のみんなで読み、作品を再発見する授業は、今日も続いています。

1 p 神話へのチャレンジ

西中学校 西郷 昌弘

起 誰のための宿題か

全員一律の1 p 学習について疑問を持っていました。誰のための、何のための1 p なのか？ 過去の印象的な生徒の声を記します。「ノートを出さないと成績下がるでしょ」（「合唱コンクール優勝したら1 p 1週間なしね。」の担任の言葉に）

「やったー」「1 p などは学校の休み時間にやってしまい、家に帰ってからは学力を上げるために塾の勉強をがんばりたいです」彼らの言葉に1 p が学力向上につながるという意識は感じられません。

私自身は1 p を宿題として課そうと思ったことはありませんでした。しかし、1 p を宿題とせざるを得ないことがありました。その際の保護者の声を紹介します。上位の生徒の保護者は、「1 p に何の意味があるんですか。」という文言を学校評価に書いてきます。低位の生徒の保護者は「とにかく宿題をたくさん出して欲しい」と懇談会で話します。きちんと英語を書ける生徒が、彼らにとってあまり意味のない1 p で時間を無駄にし、書けない生徒が適当にノートを埋めるために書き殴るだけの学習。誰も幸せになりません。

承 こんな宿題出してみた

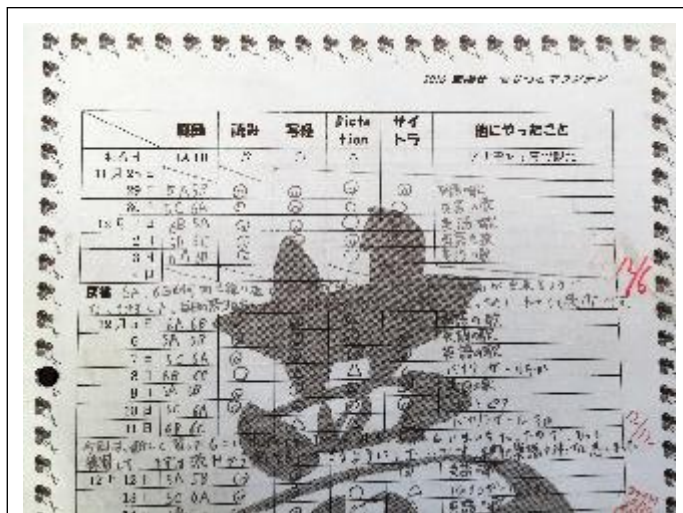
今年度、1年生の英語の担当となりました。英語を嫌いになって欲しくはない。しかし、英語の力を付けて欲しい。英語の力を付けるためには家庭学習は不可欠です。そこでこんな宿題を出してみました。

5月 大文字・小文字を○日までに言いながら書けるようにしよう。・・・①

6月 フォニクスチャンツを毎日歌ってフォニクスをものにしよう。・・・②

7月～夏休み 今まで学習したことを音読、i 写経、ディクテーション、ii サイトラを毎日やって言いながら書けるようにしよう。音読だけでもOK。やったことを毎日記録しよう。・・・③

夏休み以降 学習した内容を言いながら書けるように、夏休みと同様の努力を積み重ねよう。やったことを毎日記録しよう。ほんの少しでも毎日英語に触れよう。1週間の英語学習に対する反省を記録しよう。・・・④



転 授業での有用感がやる気を後押し

宿題に対する評価をどうするか。有用感・達成感をどう与えるか。

- ①に対しては、対面方式でチェックしました。生徒によっては何度も行いました。
- ②は毎時間授業の最初に行っているリスニングテストでチェックしました。発音できない語は聞き分けられないので、家でチャンツを確実に口ずさめば高得点が得られることになります。宿題をやることが授業に役立つという意識が醸成されました。
- ③は9月にサイトラのテストを夏休みの復習テスト（5教科実施）の際行いました。テスト個票にもその得点は反映されました。直接テストに結びつくとなればやる気も出るはずです。
- ④はⁱⁱⁱ ちりつもマウンテンシート（前頁写真参照）の定期的な提出や定期テストの問題への一部サイトラ形式を導入で対応しています。

11月に取ったアンケート（左下写真参照）から生徒の声を紹介します。「テストなどに役立っている。困っている子に教えられる。」「サイトラをやっていると授業や教科書の文の意味がわかり、単語を覚えることができる。」「サイトラで英語文をスムーズに作ることができるようになった。」「サイトラを毎日やらないと、いつも授業の最初にやる曲の時のクイズができなかったり、頭に入らなかったりすることが多くある」「サイトラをやることで文の並べ方がわかる」「書けなかった文もサイトラでやっていたら書けるようになった」「サイトラを毎日やったら、いつのまにかできていたということが多い」「授業でわからなかったところがわかる」など。宿題と授業が生徒の意識の中でリンクしていることや、有用感・達成感

| 7月 | 11月初旬 |
|----------------------------------|---|
| 5 4 ② 1 | 5 ④ 2 1 |
| 採点理由 予復習は作っている けどあまりできていない | 採点理由 サイトラをやると前と比べ これは授業の理解 度にかかり差がここには ない |

が文言から感じられます。宿題は授業のため、宿題をやったら授業がわかった。授業の充実が学力向上につながる。この点がポイントだと思います。また自分のペースで、自分でやることを選択できることも重要と考えます。

結 意欲が学習を支える

ちりつもマウンテンシートは基本的に毎週提出することになっていますが、未提出の生徒に出すことを強制していません。しかし、日がたつにつれ提出率が上がってきました。それは有用感と達成感を感じる生徒が増えてきたからだと思います。「出させる宿題」から「やりたくなる宿題」という理想への第一歩は踏み出せたと思います。しかしこれは始まり。確実に1pを超えたと言える家庭学習の模索は緒に就いたばかりです。

- ⁱ 覚えようとする英文を心を込めて丁寧にノートに書き写すこと。
- ⁱⁱ サイトラトランスレーションのこと。一般的には英→和だがこの場合は教員が用意した日本文を英文にするというもの。
- ⁱⁱⁱ 「塵も積もれば山となる」からつけられた名前。小さな努力を毎日積み重ねて欲しいという気持ちが込められている。

2年目教員 1年生の担任として

桜が丘中学校 佐藤 徹弥

何事にも全力でとりくみ、やさしきで絆をつくる学級を目指して

4月7日、忘れもしない出逢いの瞬間。ブカブカの制服を着た1年5組と対面しました。あいさつの声が大きく、元気のある子どもたちだと感じました。しかし、テンションが上がりすぎてしまい、静かに指示を聞くことが苦手な集団でもありました。数週間、一緒に生活してみると、昨年担任したクラスと比べ、積極性があり活発な子どもが多いが、集団で何かに向かって取り組むことは苦手であるとわかりました。中学生になった彼らには、単純な元気さや積極性だけでなく、その行為の意味を理解して、仲間とともに向上することの良さを知ってほしいと感じました。本校の研修テーマは「生徒が主体的に取り組む授業づくり」



です。主体的というのは、単に積極的ということではなく、そこに価値を見だし、生徒が目標に向かって一生懸命取り組むことです。そこで、この「主体的」という部分を学級経営の柱と捉え、「目標を共有すること」「子どもたちに先を見通させること」の2点を中心に取り組むことにしました。

目標設定、目指すは1番！

目標を立てるだけは簡単です。それを達成することが難しい。もちろん、簡単な目標もあれば難しい目標もあります。入学してしばらくして、慣れが出てきました。そんな、ただなんとなく過ごしているクラスに対して話し合いの時間を設け、「目標を立てよう」私から言った言葉はこれだけでした。その具体的な内容については、子どもたちがみんなで考えました。小学校と中学校の大きな違いは何か。それは、体育大会“桜夏祭”と合唱コンクール“秋桜祭”の2大行事があることです。「2大行事で1番になろう！」この一言が学級を支え、心を一つにするような言葉となっていきました。そして、1番をとる上で、友情を大切にし、やさしきで絆をつくっていくという意味で『友情・絆～5組魂～』という学級目標に決まりました。



「何でも1番をとる！」こういったシンプルな目標が、意識しやすく達成したかどうかすぐわかります。同時に、達成することは難しいです。

結果の先に見えたもの

桜夏祭では、1年生の優勝、秋桜祭は堂々の最優秀賞に輝きました。望んだ結果とはいえ、実際にとってみると自分自身でも信じられませんでした。しかし、このような結果になったのには理由があるはずだと、自分なりに2大行事で1番をとることができた理由を考えました。

- 行事への取組を認め励ますことで、生徒たちが主体的に取り組んだこと。
- 前年度の経験から予測し、準備ができたこと。
- 日々の生活から、心を育て集団生活を意識させられたこと。
- 行事だけでなく、何でも全力で取り組み、1番を目指すことが習慣化されたこと。

主体的に取り組むことは、何においても大切だと感じました。子どもたちが、やる気になってやろうとしないと、いくら結果が良くても喜べないものになってしまいます。しかし、そのやる気を出させるのは教員の役割だと感じました。子どもたちにとっての壁やつまずきを予測し、対策を講じる。リーダー会を開いたり、行事に対するみんなの想いを書かせ、冊子にしたり…。前年度の失敗を生かし、1番に練習を始めさせる。どれも教員側が予測し動くことです。



また先を見通せるよう、普段から定期的に学級通信を発行していますが、行事前は毎日必ず学級通信を発行し、子どもたち同士の絆を深める手段としました。1番を目指すことを意識させ、日々の小さなことも一生懸命やり、生活を充実させることが大きな結果につながると実感しました。

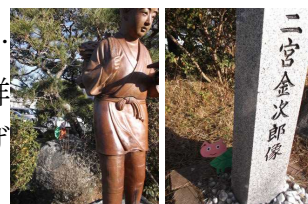
この1年をこれからに生かす

この1年は昨年に比べて、少し余裕ができたと思います。その余裕を気の緩みや惰性にするのではなく、先を見すえ、周りに気を配ることにつながれたと感じます。今年は生徒も私も全力で取り組んだからこそ、2冠を達成することができました。このこと自体はとてもうれしいです。しかし、学年全体の成長やバランスを考えることも必要だと気がつきました。自分たちだけよければいいのではなく、学年の仲間がいるから、競う相手がいるからこそ、自分たちが成長できるのだと感じました。自分の学級だけでなく、所属学年全体を見て子どもたちに接することができる教員になりたいです。この子たちをこれからも見守り、育て、自身も教員として成長していきたいです。2年目の経験を3年目に生かしていきたいです。

出現！謎のベニア人 ～ベニア人の謎を探れば原野谷中が見えてくる！？～

原野谷中学校 池谷 恵

正門をぬけると目に飛び込んでくるのは、二宮金次郎像…だけでなく、その背後から大きな目でこちらを見据える色鮮やかなフクロウ。その下、二宮金次郎と書かれた石柱のかけから、顔を半分のぞかせているのはピンクのブタ…。この冬、



原野谷中学校に突如現れたユーモラスな生き物たち。はたして、その正体とは？

これまで、「原野谷川の河童たち」「大高山の鬼」など、未知の生物を創造し、命を吹き込んできた原野谷中学生徒たち。そんな原野谷中学校で動き出した新たなプロジェクトは、『謎の生命体、「ベニア人」を誕生させろ』挑んだのは、卒業を控えた3年生、44人。うすいベニアに込めたあつい思い。うすいベニアとのあつい戦い。

わずか2ミリのベニアに命を吹き込んだ3年生美術科のものがたりをご紹介しますながら、原野谷中学校の取り組みをお伝えします。

ベニア人のルーツは「だまし絵」にあり？ ～教科間のつながりを大切に～

思えば、昨年度。国語科でだまし絵を扱った文章を学習していることを知った美術科教諭城下は、階段踊り場にトリックアートを紹介するコーナーを設置。静止しているのに揺れて見える絵、平面なのに立体を感じる絵、見方を変えると二通りに見える絵…。近づいたり離れたたり、顔を傾けたり…いろいろな見方を試して楽しむ生徒の姿が見られました。そして、このだまし絵の要素が、ベニア人制作にも生きてくることになるのです。

教科で学習したことを他の教科や生活の中で生かす場面はないだろうか…原野谷中学校では、教科間のつながりを大切にしています。

学校中がギャラリーに！（赤堀マサシ展）～地域のみなさんの力を借りながら～

夏休み明けには、赤堀マサシ氏の作品展を開催しました。展示場所は学校中。平面なのに立体に見える…そんな不思議な作品34点が学校のいたるところに置かれました。「え？こんなところにも！」生徒たちは、宝探しのような感覚で鑑賞を楽しみました。そして、この展示スタイルが、自分が作った「ベニア人」をどこに置くかというモデルにもなっていました。



原野谷中学校では、保護者との連携を大切にし、様々な分野で活躍されている先輩や地域の方のお力をお借りしながら、生徒が「りりしく・たくましく・あたたかく」成長することを目指しています。本年度も、このベニア人制作をはじめ、キャリア教育や防災学習、数学塾や部活動、全校道徳など、様々な場面で、多くの方にご協力いただきました。今後も、原野谷学園

のみなさんとのつながりを大切に、心ゆたかな生徒の育成に努めていきます。

想像と創造は無限大！ ～生徒が主体的に取り組み、自分の思いを表現できる授業～

赤堀マサシ氏を講師に迎え、いよいよベニア人制作。赤堀先生から出された課題は「静岡の有名なものと生き物を合体させたベニア人」。富士山を甲羅に見立てたカメ、うなぎの耳をもつウサギ、お茶が注がれた湯呑みを抱いて丸くなるネコ、お茶の葉を羽にもつ鳥…生徒は次々にユーモラスな生き物を想像し、その形を創造していきました。



原野谷中生は、言われたことを素直に聞けるというよさがある一方、自分で考えて行動することや自分の思いを伝えることに苦手意識をもっています。私たち教職員は、授業改善3ヶ条を掲げ、生徒が主体的に課題に取り組み、自分の思いを表現する活動を積極的に取り入れています。



清麗の庭がベニア人の都に！？ ～原野谷中生の心を育む清麗の庭と鐘～

できあがったベニア人の居場所をどこにするかは、生みの親の自由。生徒たちは、思い思いの場所に自分が命を吹き込んだベニア人をそっと置いていきました。昇降口のベンチに座るベニア人、廊下の片隅からこちらを見上げるベニア人、木陰にたたずむベニア人。そんな中、一番の人気エリアは、原野谷中のシンボルプレイス「清麗の庭」。「清麗の鐘」を仰ぐベニア人、藤棚の下でくつろぐベニア人、校章のオブジェの真ん中に鎮座するベニア人も…。清麗の庭は、朝夕美しい鐘が鳴り響き、原野谷中生が、今の自分を見つめ、未来を思う場所です。そんな清麗の庭に新たな仲間が加わりました。



生徒はもちろん、ベニア人だって居場所がある！～安心であたたかな学校をめざして～

自分の作品を好きなところに自由に飾れる学校というのは、なかなかないのではないのでしょうか。少人数であることよき、そして、なにより、自分の作品を安心して飾ることのできるあたたかさがあるからこそできることだと思います。

原野谷中学校は、生徒の作品であふれています。飾られた作品を前に生まれる会話、こぼれる笑顔。

作ったことで終わりではない。作ったものを見てもらうことで、喜びが続いていく。見せてもらうことで、自分も挑戦したくなる。原野谷中学校美術科は、作る過程も作ったものも作ったあとも大切にしています。



今日も、学校中のあちこちで、ベニア人は、私たちが癒してくれています。

知的な英語授業を目指して

北中学校 宮崎 直哉

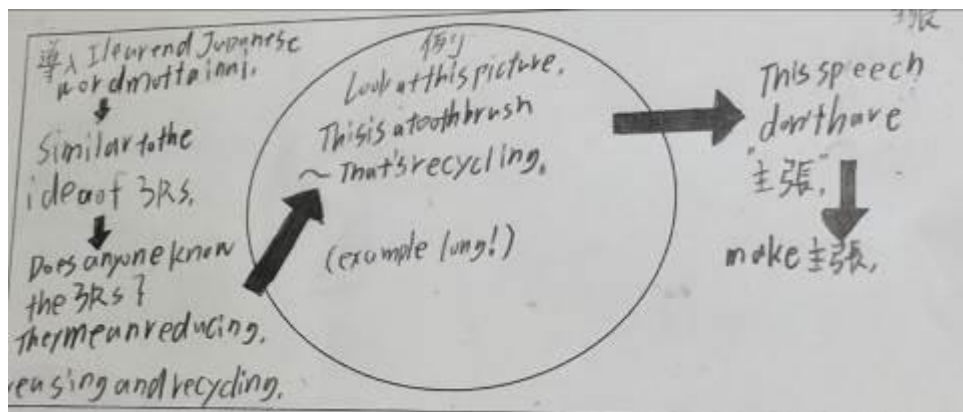
理解する = 日本語にする？

「テストだと英語の文の言っていることはわかるんだけど、日本語にしていると時間がなくなっちゃう。」このような悩みを4月に聞きました。英語は外国語なので、日本語に置き換えて理解しようとするのは自然なことです。しかし、日本語にすることがそのまま理解していることになるのでしょうか。理解するためには様々な方法があるはずです。日本語に訳すということは、その中の1つの方法であるはずです。和訳自体は大切な技能ですが、1つの技能に固執しすぎることなく様々な方法を身につけることができれば、それは価値のあることなのではないでしょうか。この生徒のように、英語で書かれていることがそのままわかるということはむしろ素晴らしいことです。機械的な和訳だけではなく、知的に英語を読むというテーマでの挑戦が始まりました。

英語授業を知的にしたい

「英語を英語のまま理解する」と言っても、英文を与え、そのまま読むという活動では何も変わりません。そこで、単語や文法のような表面的な意味理解や内容理解だけではなく、書かれている話の内容や構造に注目するようにしました。

説明文や物語文、日記など、書かれている話の内容によって、方法は変わりますが、話の内容を図式化するようにしました。説明文なら論の展開がわかるように、構造を図式化し、日記であればタイムラインを作ってみるなど、いくつかの方法を行いました。これらの方法には慣れが必要ですが、何回か実際にやってみると、生徒は自分がやりやすい方法を見つけ、教師のヒントも無しに英文を読むことができていました。さらに驚いたことに、教科書に紹介されているスピーチの内容を読み取り、「この話には主張が欠けている」という指摘までするようになりました。



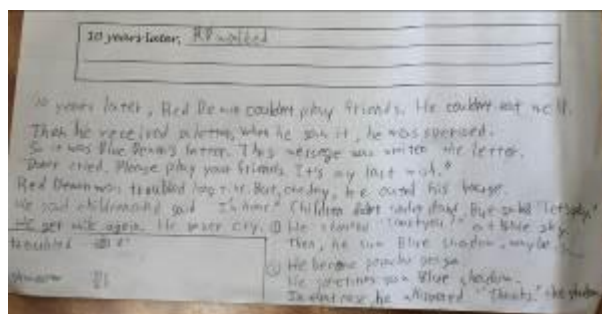
深く読むことの落とし穴

英語を読む方法を身につけ、表面的な理解だけでなく、内容までじっくりと読むことができるようになったものの、次の課題が挙がりました。「話すことって難しいですね。何ていうか…発音も違うし、すぐに答えなくちゃいけないし、書かれていればわかるけど、声に出すと難しいです。」このような生徒のつぶやきが秋頃に聞こえました。論理的に英文を読むことに特化するあまりに、口頭表現の機会が減ってしまっていたのです。英語を知的に受け取ることができるようになって、そこから考えたことや、感じたことを表現できるようにする必要性を感じました。

自分を表現する授業に

表面的な内容理解ではなく、話の内容や、書き手が本当に伝えたいものは何か、という点に注目して読む活動を行ってきたので、次はその読み取った内容を表現に繋がりたいと考えました。そこで、英語で書かれた話を読み、その話に関連する絵を用意し、それらの絵を基に英語で話して伝えるという活動を行いました。生徒にとっては難しい活動になるだろうと予想しましたが、思いのほか、スムーズに活動を行っていました。話の内容を深く理解することができるようになっていたので、あとは既存の知識を使って説明するだけだったのです。自分なりにオリジナルの文や説明を付け足す生徒も多く、話す内容にも個性が表れていました。英文の内容を深く理解していれば、丸暗記する必要などなくとも、十分に英語を駆使して自分なりにストーリーを再構築して口頭で伝えることができるようになりました。

また、「表現」という技能については、日本語では素直に言いにくいことを英語だからこそ表現できるようにしたいという教師の思いがありました。そこで、物語文を読んだ際には、話の続きを考えたり、本文には書かれていない登場人物のセリフを考えたりする活動を行いました。2年生の教科書には「泣いた赤鬼」を元にした英語の話があります。この話の10年後の物語を英文で書くという活動では、読み手の心に強く伝わる力作が出揃いました。それらは書き手である生徒の今の悩みや人間性、生き方のようなものが伝わるものばかりでした。英語の表面的な意味理解や内容理解ではなく、読んだり、聞いたりした内容に対して、どのように感じ、何を考えたのかを表現することこそ言葉を使った知的な活動です。生徒の深い心情や心の動き、考察などを英語を通して共有することで生徒の持つことばの可能性は広がると感じました。



「生徒が主体的に追究・表現する」授業をめざして

城東中学校 小杉 栄乃

起 … 城東中は一步前に踏み出せたか。

「素直で前向き」、「責任感がある」。しかし、「自ら進んで問題を解決すること」や「工夫して新しいものを生み出すこと」などが苦手。そんな城東中生に、「一步踏み出す勇気」をもってほしいと願って臨んだ授業改善でした。共通実践項目として、「学習課題・場面設定・学習形態などを工夫し、生徒が主体的に追究・表現するための手立てをうつ」ことを掲げ、校内研修を通して、どんな手立てがあるかを共有し、有効なものを自分の授業に取り入れることを実践しました。

承 … グループ研修

校内研修の具体的な取組として、3人のグループ研修を行いました。「生徒が主体的に追究・表現するための手立ては有効だったか」という視点をもってお互いの授業を見合い、意見交換をしました。社会科では、「日本の選挙の投票率をあげるにはどうしたらよいだろう」という学習問題でジグソー学習を行ったり、クイズ形式のプレゼンテーションで導入を行ったりしました。英語科では、インターネットを使って情報収集し、一人一人が簡単なプレゼンテーションを作って「尊敬する人や憧れの人を紹介しよう」というスピーチ活動を行ったり、ペア活動や班活動など様々な形の小集団活動を行ったりしました。国語科では、「俳句」や「七言絶句をもとに4コマ漫画を描こう」など、創作の時間を確保し、友達同士で読み味わいました。英語科と数学科においては、デジタル教科書を利用した授業も行いました。小集団活動を積極的に取り入れたり、ICTを使って生徒の興味関心をひく導入をしたり、自己表現する場面設定をしたりすることが、生徒が主体的に追究・表現するチャンスにつながることを共有しました。

転 … 地域支援課訪問での実践

〈「生徒が主体的に追究・表現する」ための手立てとして小集団活動を取り入れた実践 2年 数学科「一次関数を活用しよう」〉

グループ研修で有効であった「小集団活動」を取り入れた授業を、地域支援課訪問の中心授業で行いました。封筒の中にある図形が入っています。「封筒から引き出した図形の面積の変化のグラフから、図形の形



を考えよう」という活動を通して、「グラフと具体的な事象を関連付け考察することができる」ことが目標でした。様々な方法を用いて、意見を練り合いながら問題解決をするために、小集団活動を手立てにしました。日頃の生活班を組み替えて、3～4人の学習班を作りました。また、考えるための材料として様々な教具を用意しました。実際の話し合いでは、「グラフが曲がっているところはどこになっているの?」「予想した図形がL字型になっているのはどうして?」「長方形でなくちゃだめなの?」など、各班で活発な意見交換が行われ、様々な教具を利用しながら、試行錯誤しました。グラフの傾きと図形の縦の長さの関係を読み取り、図形を作る作業は簡単ではありませんでしたが、どの班も、根拠をもった答えを出そうと知恵をしぼっていました。数学が得意ではない生徒も、友達の話聞いて考えようとする姿が見られ、理解の差はあったものの、「傍観者」でいる生徒はおらず、全員が話し合いに参加することができたと思います。小集団活動は、全ての生徒が課題に取り組み、考えを練り合う手立てとして大変有効でした。

一方で、城東中の授業の大きな課題も見つかりました。それは、「教師の講義型授業」からの脱却が必要ということです。教師はどうしても生徒の発言を受けて説明を加えたり、まとめたりしがちです。それを、生徒が主体となって行うために、生徒の言葉をつなぎ、生徒が説明していく手法を見出さなければなりません。ある先生は「今の説明で分かった人?」と質問をして、分かった人にもう一度説明をさせたり、隣の席の生徒と説明をし合って、分かりやすかった説明を全体で共有したりしていました。振り返りの場面で、授業内容を教師が押さえるか、生徒の言葉で理解を確認するかでは、生徒の達成感も異なってくるはずですよ。

結 … 一歩踏み出す勇気を教師に！

本年度の校内研修では、「生徒が主体的に追究・表現する」ための様々な手立てを共有することができました。しかし、共有したものをそれぞれの授業に生かしたことと、まだ生かしきれていないことがあります。小集団活動についてはどの教科でも成果が上がっているので、これからも継続していきたいと考えます。まだ、生かしきれていないことが、「ICT活用」や「生徒が説明するための手法」です。ICTは、タブレットが40台導入されており、その利用は急務の課題です。また、「教師が話す>生徒が話す=講義型授業」から「生徒が話す>教師が話す=生徒主体の授業」にチャレンジしていかなくてはなりません。生徒が一歩踏み出し、自分を表現するためには、まず教師が新たなチャレンジをしていく必要があると思います。来年度は、「生徒と共に創り上げる授業」を目標に、勇気を出して授業改善に臨みたいと考えています。

Road To Active Learning ～ICTを効果的に用いて～

大浜中学校 大杉 鏡康

起・・・掛川市指定研究校としての研修

本校は、平成28年度、29年度に掛川市の ICT 指定研究校になっています。研修テーマは「主体的・協働的な学びの研究 ～ ICT の効果的な活用～」です。平成29年11月16日の研究発表会に向けて、以下のような校内研修を進めてきました。

- ①静岡大学の益川先生や、県教育委員会情報化推進室を校内研修に招き、連携をとりながら実践を進める。
- ②年間を通して8回、ICT 機器を用いた中心授業を行う。
- ③「COCO見て ICT」という ICT 授業公開期間で全職員がお互いの授業を参観する。
- ④研究推進委員会を重ね、発表会に向けて理論づくりをする。

承・・・多くの実践から見えてきたもの

ICT 機器の活用について、多くの指導案を作成し、実践していく中で、大きく2つの活用法が見えてきました。

(1) 自分を振り返る使い方

一つ目は、自分の表現の様子を自分や仲間を確認し、さらに高いレベルの表現に生かしていく方法です。2年生の保健体育の授業では、バレーのレシーブの様子を撮影し合い、よりよい身体の使い方を考えることができました。また、3年生の英語の授業では、小集団でスピーチの様子を撮影し、わかりやすい表現を話し合うことができました。自分の表現を客観的に分析することが、生徒の学びあいに効果的につながっていきました。タブレット端末などの ICT 機器を活用することで、より手軽で効率よく行うことができました。



2年 保健体育



3年 英語

(2) 議論を深める使い方

2つ目は、個人の考えを全体で共有し、深い学びあいにつなげる方法です。1年生、3年生のモラルジレンマ型の道徳の授業では、スカイメニューを用いて、個人の考えを共有し、考えを深めることができました。また、2年生の数学では、バイシンクを用いて、より多面的・多角的に図形の性質を思考することができました。2年生の社会、1年生の理科では、ジグソー学習をタブレットを用いて行い、生徒の考える時間を確保してクロストークにつなげることで、効率よく授業を進めることができました。紙媒体や、ホワイトボードでもジグソー学習は可能ですが、ICT機器を用いることで、より対話や議論の深まりや質の向上を感じることができました。



1年 理科



2年 数学

転・・・ICT機器を使えばよしではない

このような実践を積み重ねて行く中で、「ICT機器を使うことが目的となってしまう」という意見が、出るようになりました。ICT機器は、あくまでも主体的・協働的な学びを創り上げ、生徒の学力を向上させるためのツールです。そこで、実践を通して目指す生徒の姿を、もう一度議論しました。その結果、「他と関わりながら、よりよい考えや表現を生み出し課題を解決しようとする生徒」というゴールを明確にし、さらなる研究を進めていこうと考えています。

結・・・研究発表会に向けて

主体的・協働的な学びを実現するためには、まだまだ課題があります。特に、全職員でイメージを共有し、一丸となって研修を進める必要があります。「1人の100歩よりも100人の1歩」を合い言葉に、ICT機器を効果的に用いて、生徒の学力を向上させます。

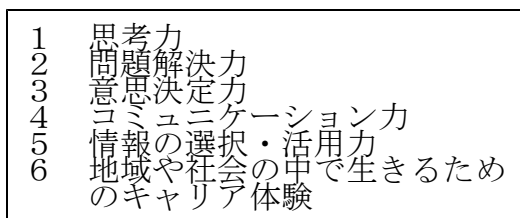
大浜中学校の実践のものがたりはまだまだ続きます。

これからの社会に求められる資質・能力の育成を目指して

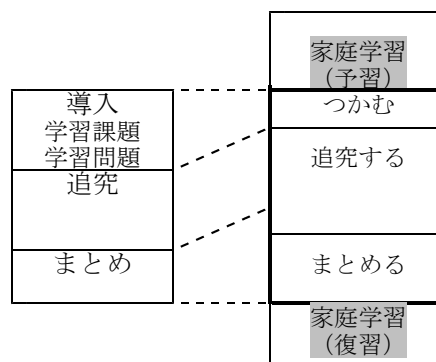
大須賀中学校 横山 慎吾

大須賀中学校のこれまでの取組

掛川市では、21世紀を生きる上で必要な資質・能力を「かけがわ型スキル」として位置付けました。そこで大須賀中学校では、授業の中で「かけがわ型スキル」を發揮させるために、本時の課題につながる予習を家庭学習に取り入れることで、導入にかかる時間の短縮を図りました。そして、生み出された時間を追究やまとめの時間とし、スキルを發揮させる展開を仕掛けました（おおすか型授業スタイル）。昨年度には、その「おおすか型授業スタイル」の中でICTをツールとして活用する研究発表が行われました。



【資料1 かけがわ型スキル】



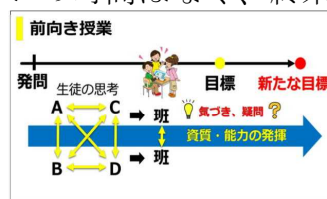
【資料2 おおすか型授業スタイル】

前向き授業を目指して

今年度は、課題の追究の方法について、前向き授業（目標創出型授業）を積極的に研究・推進しています。この前向き授業は、ただICTを活用する授業や、ただ生徒に考えさせる時間を増やす授業とは違い、学習者を中心にしてICTをじっくり使いながら対話の中で自分の考えを深め、教師と子どもと一緒に目標をつくる、そして新しい疑問や気づきがうまれていく、そんな授業になります。

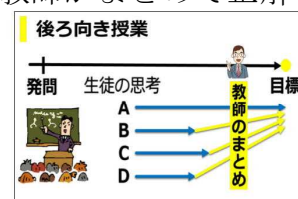
私たちは、研修の中で、後ろ向き授業と前向き授業の両方の指導案を考え、比較検証してきました。たとえば3年生の同じ学級で、社会科公民「地方自治」の単元を、最初の1時間は後ろ向き授業で行い、次の1時間は前向き授業で行います。このときの後ろ向き授業案は、教師が知識を順番に教える授業展開で、個人で追求する時間はあっても生徒同士の話し合いの時間はなく、終末は教師がまとめて正解を伝えて終わる授業となっています。

一方で、前向き授業案は、知識構成型ジグソー法を取り入れた目標創出型授業となって



他者との対話の中で自発的に資質・能力が發揮される

【資料3 前向き授業】



教師主導で授業が進むため生徒の資質・能力は發揮されにくい

【資料4 後ろ向き授業】

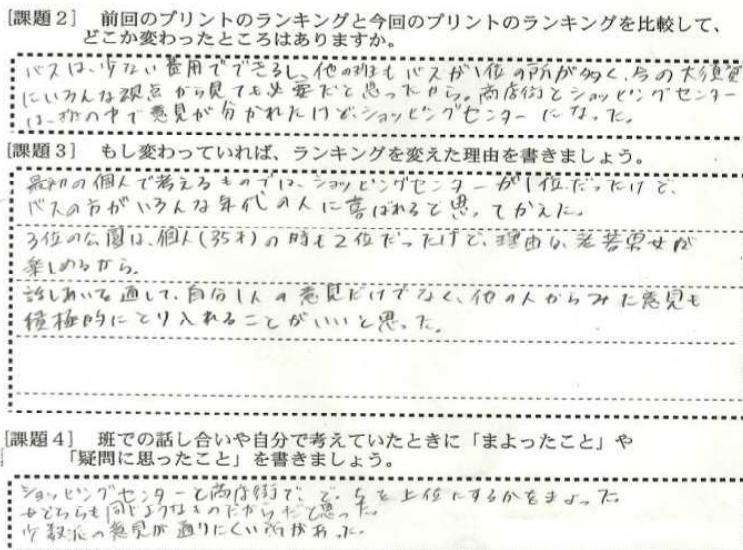
おり、提示された課題について個人で考えたあと、エキスパート班・ジグソー班での話し合い活動があり、終末も教師のまとめはせず、自分の考えの変容と新しくうまれた課題をまとめるものになっています。それぞれの授業後に21世紀型スキル獲得のための授業かどうかのアンケートを実施し、結果を比較検証しました。



【資料5】ジグソー学習



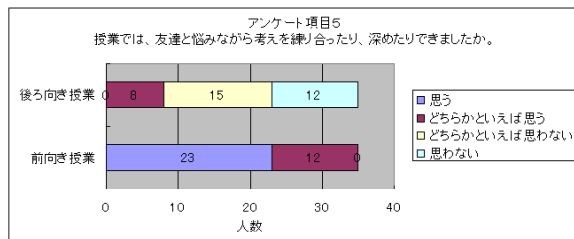
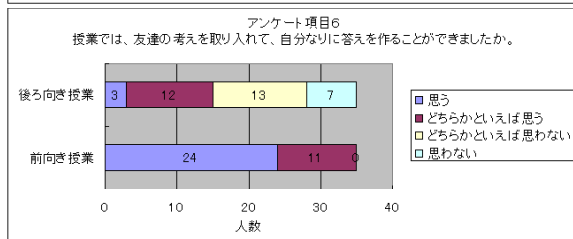
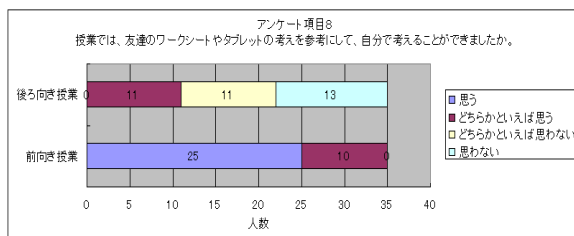
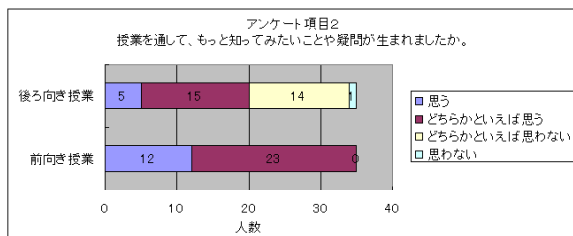
【資料6】ランキング法



【資料7】自分の意見の変容を記録したワークシート

アンケート結果をみると、「友達のワークシートやタブレットの考えを参考にして自分で考えることができたか」など深い学びや対話的な学び、主体的な学びが起きたかという項目では、100%が「思う」または「どちらかといえば思う」を選んでいきます。後ろ向き授業の結果と比べると、前向き授業では、対話を通して複数の視点や立場から考えることができ、深い思考や解決策を求めていく建設的なやりとりや自分の思考の変化・成長があったことが確認できました。

9月に行われた「公開授業週間」では、こういった授業案の比較を事前研修で全教科で行い、全員が前向き授業を公開しました。今後も、まずは教師側が前向きに、授業改善に取り組んでいければ良いと思います。



【資料8 アンケートの比較結果】